

どうで碌なもんぢやアない、あゝいふ奴はこんな所へ來ても、えては食ひ逃げをして、ぶちのめされるもんだ、イヤ時に盃はどうしたさる「ホンニ忘れた」と猪口取とあげて飲まうしとたところが、酒はいつすいもなし」「オヤこぼしたさうな（とそこらあたりを搜りまはし）」「ハテめいよふな、改めてさよう（と又一杯つき、一口飲んで下におくと、北八又そつと引よせ飲んでしまふ）」「いぬ」かうしてゐる所へ先刻の奴等が來たら可笑しからうさる「ナニあついらは大方着物をしぼつたり干したりして、まだあつちにまこつてゐるだらう、智恵のないべらぼう共だ」と云ひながら盃をとりあげた所が、又酒はいつすいもなし）」「さる」これはどうだ いぬ」又滾したか、いくぢのなさる「イヤこぼしはせぬが、ハテ奇妙てうらいな いぬ」イヤ手めえそんなことばかり云つて、一人で飲むな（と此内北八銚子を取り、自分がのんだ茶呑み茶碗二つにあけて、そつと銚子をもとの所におく）」「いぬ」コリヤ猿さる、盃を廻さぬかと、ひつたくり、銚子を取つて

ついで見て「ヤア此猿市め、一人でくらつてしまやアがつたさる「ナア二とんだことを いぬ」それでも銚子がさつぱりださる「なんだ銚子がない、イヤこゝの御亭主く、わしらを盲人と侮つて、こんな横着をさしやるか、二合の酒がたつた二口ふたくちのむと、もうないはどうしたもんだ 亭主「ハイそれは二合、しかもたつぶりついであげましたに、大方こぼしなかつたもんだんでさる「ナニこぼすもんだ、商人あきんどに似合はぬ事をさしやるから、此酒代は拂ひませぬぞ（と、大きに腹を立てる。此時門口かどぐちに遊んでゐる子守が、さいぜんより見てゐたりしが、北八の方へ指さしをして）子守「ワイ座頭どんのさけウ、みんなあの人茶碗へついでしまはつせいた 亭主「オヤこの子はとんだことをいふ、コヤレア茶だく（といひながら、のみさした茶碗の酒をのんでしまふ） 亭主「イヤおまい酒臭いは、そして顔が赤くならしやつたは、大方あの衆しゆの酒を飲ましやつたな 亭主「この人も同じ様に途方もねえ、わしが顔の赤くなつたのは茶に酔つたのだ、わしは

は餘程智慧のねえ男だ

することもなす事も皆あしくばや茶にしられたる人のしがなさ

斯興じ打笑ひツ、頓て秋葉三尺坊への分れ道に至り、彌次郎兵衛遙拜して

脇差の二尺五寸も何かせむ三尺ぼうの誓ひたのめば

それより澤田細田を打過ぎ、砂川の坂道にかゝりけるに、兩方より木立生茂

りて日の影暗く、折節往來もと絶えたるに、誰とも知れず「コウレ〜、旅の

人ウ〜、（と呼びかけられ、兩人後を振り返りみれば、傍の木陰より、のさ〜

と懐手にて出て来るは、どてら布子に一腰ぼつ込み、山岡頭巾を被りたる髯だ

らけのむさくろしき男、彌次郎北八が向へ廻り立はだかる、二人はびつくりし

怖々ながら「彌コリヤ、晝日中に何の用だかの男イヤ、酒手を一文下さいま

せ、ハ、ハ、ハ、喜何のこつた、それで落ちついた、ソレ一文 彌あつたら膽を

潰さしやアがつて、忌々しい乞食めだ、（と眩き乍ら原川を打過ぎ、早くもなく

りの建場に着く。こゝは花蘆を織りて商ふ

道ばたに開く櫻の枝ならで皆めい〜に織れる花蘆

程なく袋井の宿に入るに、兩側の茶屋賑はしく往來の旅人各々酒飲み食事杯

してゐたりけるを、彌次郎兵衛見て、

こゝに来て往來の腹や脹れけんされば布袋のふくる井の茶屋

此宿はづれより上方者と見えて、棧留の布子に銀ごしらへの脇差を差し、花

色羅紗の装束掛けし合羽を着たる男、供一人連れて後になり先になり 上方もの

モシ、お前方はお江戸ぢやな 彌左様さ 上方俺も毎年下る者ぢやが、お江戸は

きよとい（氣疎）繁昌なところぢやわいの、アノ吉原へもちよ〜誘はれて晝三

とやら云ふおやまを買ったが、何時も人にふれまは（振舞）れて行くさかい、な

んぼか〜つたやら、此方知らんが、お前方も定めて買ひなさるぢやあらうが、

アリヤなんぼ程かゝるぞいな 彌わつちも女郎買ひでは地面の五ヶ所と十ヶ所

は無くしたものだ、ナニ^{ちち}晝三位では僅なことさ、マア平^{ひら}の晝三なら、片じま
 ひで一分二朱、茶屋が一分か、藝者が一組で又一分、そして一斤^{いっぴん}くでもとれ
 ばその代が二百ヅ、かゝるぶんのことさ、^{上がった}「ハテノ、わしも大店^{おほみせ}は諸所へい
 たが、其いつきんくといふは何のこつちやいな、^{ソレ}「ソレヤア、酒一斤^{きんさかな}肴一斤
 など、内の酒が飲めぬから別に外から取寄せることさ、^{上がった}「ハア、わしがいた
 (行)内ではそない(其様)なことは無かつたわいな、そして何も飲めぬ酒は出し
 やせんわいの、えらう好い酒であつたわいな、^{ナニ}「それやア飲める酒でも
 飲めれえと云つて別にとるが江戸つ子の氣性さ、^{上がった}「そして上方ではみな借つ
 て戻るが、お江戸の女郎は現金拂ひぢやさうな、^{ナニ}「サ、あそこでも附馬^{つぎま}を
 連れて歸りさへすれやア、いくらでも貸してよこしやす、^{上がった}「ハ、ハ、ハ、ハ、コリ
 ヤお前は大見世のお客ぢやないわいの、その附馬とやらいふことは、わしらが
 店^{たな}の職人衆^{はなし}の嘶^なで聞いてゐますが、晝三^{ちゆう}買ひにそんなことはありやせんわいな

無^ななくてさ、ほんにわつちらア尻に四ツ手駕籠^{たこ}の蛸^{たこ}の出来たほど通つたもの
 だ、ナニれえことを云ひやしやう、^{上がった}「ハアそんなら、お前のお馴染^{なじみ}は何屋ぢ
 やいな、^{アイ}「大木やさ、^{上がった}「大木屋の誰ぢやいな、^と「めのすけよ、^{上がった}「ハ
 、、、、そりや松輪屋^{まつわ}ぢやわいな、大木屋にそんなおやまはないもせぬもの、
 コリヤお前頓とやくだいぢやく、^無「ハテあそこにもありやす、ナア北八、^耳
 エ、さつきから黙つて聞いておれやア、彌次さんおめえさいた風だせ、女郎^{ぢやうらけえ}買
 に行つたこともなくて、人の話を聞きかぢつて出放題^{ではうだい}ばかり、外聞^{けえぶん}の悪い、
 國者の面^{つら}よごしだ、^無「笹棒め、俺だとして行かれえもんか、然もソレ手めえを
 神^{かみ}に連れて行つたぢやアねえか、^耳「エ、あの^{おけや}大屋さんの葬^{とむら}ひの時か、へ、神に
 連れて来^{およ}まじい、成程二朱の勤めを^{およ}買つたかはり、馬道の酒屋^{むきみ}で剃身のぬたと、
 から汁で飲んだ時の錢はみんなおいらが拂つて置いた、^無「嘘をつくぜ、^耳「嘘な
 もんか、しかも其時おめえ秋刀魚^{さんま}の骨^{ほね}を咽^{のど}へ立て、飯を五六ばい丸呑にしたぢ

ヤアねえか 馬鹿馬鹿アいへ、己が田町で甘酒を食つて口を火傷したことア云はずに 喜エ、それよりかおめえ土手で好い紙入が落ちてあると、犬の糞を掴んだぢやアねえか、業曝しな上がったハ、イヤはやおまい方はとんとやくたいな衆ぢやわいな 喜エ、やくたいでも、あくたいでも、うつちやつておきアがれ、よくつべこべとしやべる野郎だ 上がったハアこりや御免なさい、ドレおさきへまぬらう(ときもをつぶし、そうくんに挨拶して足早にゆき過ぎる) 馬いまくしい、うぬらに一ばんへこまされた、ハ、ハ、ハ、(此はなしのうち、みかの橋をうちわたり、大くぼの坂を越えて早くも見付の宿に到る) 喜ア、草臥れた、馬にでも乗らうか 馬かた「おまいち、馬アいらしやいませぬか、わしどもは役に出たおま(馬)だんて、早く歸りたい、やくいくか、サア乗らつしやりまし 馬きた八乗られえか 喜安くば乗るべい(と馬の相談が出来て、北八こより馬に乗る。此馬方は助郷に出たる百姓ゆゑ感愍なり) 馬「コレ馬士どん

こゝに天龍への近道があるぢやアねえか 馬かた「アイそつ(其所)から空(上)へあがらしやると、一里ばかり(計)も近くおざるは 喜馬は通らぬか 馬かた「インネ、かち道でおざるよ(と爰より彌次郎は一人近道の方へ曲る。北八馬にて本道を行くに、早くもかも川橋を打渡り、西坂さかい松の建場に着く) 茶や女「お休みなさりやアしく、ばあ「名物の饅頭買はしやりまし 馬かた「婆アさん、異なひよりでおざる ばあ「お早うおさいやした、今新田のあんにい(兄)がどうし(同志)に行かずと待つて居たアに、コレく横須賀のおんばあ(伯母)どんに、言ひ次いでくんさい、道樂寺様に御説法があるから、あすびながらおさいといつてより馬かた「アイく、又此頃に来ずい、ドウく 喜この馬は静かな馬だ 馬かた「女おまでおざるは 喜道理でのり心がよい 馬かた「旦那アお江戸は何處だなのし 喜江戸は本町 馬かた「ハアえいとこだア、わしらも若い時分お殿様に附いていきをつたが、その本町といふところはなんでもづない(無上)商人ばかり居る所だアのし

喜オ、それよ、おいらが内も家内七八十人計りの暮した馬かたソレヤア御大層な、おかつ様が飯をたくも大抵のこんではない、アノお江戸は米がいくらしをります 喜マア一升二合、よいところで一合位よ馬かたソリヤいくらに 喜知れた事、百にさ馬かたハア本町の旦那が米を百ツ、買はしやるさうだ 喜ナニとんだことを、車て買ひ込むは馬かた「そんたら兩にはいくらします 喜ナニ一兩にか、ア、かうと、二一天作の八だから、二五十、二八十六で踏みつけられて、四五の二十で帯解かぬと見れば、無間の鐘の三斗八升七合五夕ばかりもしようか馬かた「ハアなんだかお江戸の米屋は六ヶしい、わしらにやア分らない 喜わからぬ筈だ、おれにもわからねえ、ハ、、、、此咄しのうち、程なく天龍に至る。此川は信州諏訪の湖水より出で、東の瀬を大天龍、西を小天龍といふ。舟わたしの大河なり。彌次郎此所に待ちうけて俱に此涉しを打越ゆるとて水上は雲より出でて鱗ほどなみのさかまく天龍の川

舟よりあがりて建場の町にいたる。此所は江戸へも六十里、京都へも六十里にて、振りわけの所なれば、中の町といへるよし。

傾城の道中ならで草鞋がけ茶屋にとだえぬ中の町客

それより、かやんば、薬師新田をうち過ぎ、鳥居松近くなりたる頃、濱松の宿引出向ひてモシあなた方アお泊りならお宿をお願ひ申します 喜女のいゝのがあるなら泊りやせうやと引随分おざります 彌泊るから飯も食はせるかやと引「あげませいで 喜コレ、菜は何を食はせるやと引「ハイ當所の名物薯蕷でも上げませう 喜それが平か、それ計りぢやアあるめえやと引「ハイそれに椎茸、慈姑のやうなものをあしらひまして 喜汁が豆腐に茸蕷のしらむへか 彌マア軽くして置くがいゝ、その代り百ヶ日はちとはりこまつせえやと引「コレハいな(異)事をおつしやる、ハ、、、、時にもう参りました 彌イヤモウ濱松か、思ひの外早く来たわえ、

きつくと歩むにつれて旅衣ふきつけられし濱松の風

「サア〜お着きたアよ、やどの亭主、お早くおざいました、ソレおさん、お茶とお湯だアよ、彌、イヤそんなに足はよこれもせぬ、亭主、そんなら直にお風呂におめしなさいまし、真湯灌場は何處だ、彌次さんマア先へやらかしねえ、彌、いま〜しい事をいふ男だ、手めえ先きへ這入れ、やどの女、こつちイお出てなかりまし」と、すぐに湯殿へ案内する。是内荷物も座敷へ運ばせ、彌次郎兵衛奥へ通ると、せぬや、ハイ兩替はようおざりますか、あんま、お療治をなさいませぬか、彌、オツト揉んで下さい、イヤ貴様目があるの、あんま、ハイ仕合とかたつば(片方)はよく見えます、十年ばかしもあとに風眼とやらをわづらひをりまして、兩眼ともに皆目おツつぶしてしまひをりましたが、それからこつちイ、いろ〜と療治をして、やらやつと此間左の方がよくなりました、彌、久しぶりで目があいたら、みんな知らぬ人ばかりだらう、あんま、お左様でおざります、彌、見

えない方も随分療治をなさい、直りさへすれやア見えるもんだ、時に北八湯はどうだ、(北八風呂より上り)「ア、いゝ湯だ、あんまりあつくて體が半ぶん水引のやうになつた、女、ハイ御膳をあげませう」と、こゝにて膳も出て、色々あれども略す。やがて膳もすみ、彌次郎湯にも入つてしまひ、彌、サア按摩さん、やらかしてくんな、イヤ時に今湯殿から見れば、こゝの内のかみさまかしらぬが、病人と見えて取亂してゐるが、なか〜美しい代物だ、あんま、ソレヤア氣違でおざるはのし、尋きちげえでもてえじ(大事)ねえの、あんま、イヤ聞きなさい、今に念佛がはなりますは(と、此内勝手の方にてチャンとかねのおとして百萬遍はじまる)あんま、ソレお見さい、あの氣狂ひどのはこゝの下女でおざつたが、御亭主がふつと手をつけられたを、かみさまがひどい情氣で、あの女をぶつたり、はたいたりして、とう〜さらけ出しをりましたが、兎角御亭主は不慮がつて、それからわきに圍つておきをりましたを、なぜかし(猶又)かみさまが

やかましくいつて、とうとう氣がちがひ、首を縊つて死にやりました、さうすると御亭主は又よいことにして、あの女を内へ入れると、其晩からかみさまの幽霊がとツついて、あの女が又かみ様のやうに氣違ひになつたもんだんで、それであんなに毎晩百萬遍を繰りなります(と、ひそくはなすに、彌次郎北八も口は達者なれども、性は臆病者)喜なんだ幽霊がとツついたとは、爰のうちへ其幽霊が出るかのあんま「出るだんか 喜うそをつくぜ あんま」ナニうそぢやアおざらぬ、毎晩此屋根の上に白いものが立つてゐるのを見た者がおざります喜「ヤアコリヤとんだ所に泊り合せた あんま」それにそのかみさまが首を縊つた時の顔色といふ物は、目まなこをくるりとあいて、青涕をたらし、齒をくひしげつて、それはく／＼生きてゐるやうな顔であつた 喜「ソレヤアどこで あんま」しかもソレおまいの後の縁先まで 喜「ヤアコリヤたまらぬ、どうか首筋がぞくぞくするやうだ 喜「あやにく、しよばく」雨が降り出したは、情ない あんま」今夜

などはきつと出さうなこんだ 喜「イヤコレ按摩どの、もうけえつ(歸)て下さい 喜「アノ又たしき鉦の音で一倍氣が引きいれるやうだ 喜「何にしてもいまくしい宿をとつた あんま」エ、臆病なお衆だ、ハ、ハ、ハ、喜「もうしめえ(仕舞)か北八はどうだ 喜「おらアもう疲よう あんま」左様なら御機嫌よく(と、按摩は暇乞ひして立つて行く。此の内女夜具を持ち出し、床をとりてゆく。二人ともに何時にない洒落もむだもいではこそ、只まじくじと寝入もやらず) 喜「エ、いつその事、北八今から立たうぢやアねえか 喜「ナニとんだことを云ふ、今の咄して、どう夜道があるかれるもんだ 喜「夫にこの内は、何だかだどびあいばつかりで、人が少いから、うそ氣味の悪いうちだ(と、目ばかりばちくしてゐると、鼠が天井をかける音、がらく／＼「チウ／＼」) 喜「エ、鼠までが馬鹿にシヤアがつて小便をしかけた 喜「その鼠めが羨ましい、おらアさつきから小便をしたくても、こらへてゐるに、ヤア何だか柔かな物が足にさはつた 喜「何だ何

だねこ「ニヤアン 舞コノ畜生め、シツ／＼、(百萬遍の鉦の音)「チャアン、(のきにおちるあまだれ)「ぼたり／＼(折も折と迷子を尋ぬる聲)「まよひ子の長太やア、チャ、、、チャン、(二人とも夜着の裡へもぐりこみ、きた八夜着の袖から差覗き)「どうだ彌次さん、まだ生きて居るか 舞なんまいだ／＼、ア、、時に困つた事がある、もう小便が漏るやうだ 舞お互に難儀な目に逢つた 舞何と思ひ切つて一緒に行かうか 舞雨戸を開けてやらかすべいと、(二人一しよにこは／＼起きて、そろ／＼と障子をあげ) 舞サア彌次さん 舞イヤ手めえさきへ 舞なにが出るもんだ(と、雨戸をさらりとあけたところが、何か庭の隅に白い物が中途にふは／＼。北八きやつと云つて倒れる) 舞ヤアどうした／＼ 舞どうした所か、あれを見ねえ 舞あれとは 舞白いものが立つてゐらア、そして腰から下が見えぬ 舞ドレ／＼(と、ふるへながら、恐いものは見たくなり、雨戸のそとをそつと覗き、これもきやつと云つて座敷へはひ込み倒れる) 舞コ

リヤ彌次さんどうした、オ、イ彌次さんヤアイ(と、此騒ぎに勝手より亭主かけいで、この體を見て、さまざま介抱し、やう／＼彌次郎正氣つきければ) 亭主「ヤレどうなさいました 舞イヤ小便に行つた所が、あそこに何か白い物が居たと、それで此通り、臆病な人さ、(亭主縁先きへ出てこれを見て)「イヤあれは繻絆でおざります、コリヤ／＼おさんやい／＼、日が暮れたに矢ッ張り干物をなげ取り込まぬ、そしてさつきから雨がぼろついで來たに、らつしくちもない女どもだ、しかしコレヤアお氣の毒様でおざります 舞ナニサわつちらアこはいといふことア知られえものだが、なぜか今夜は蟲の居どころが悪かつたさうな亭主「ハイおやすみなさいまし(と勝手へゆく) 舞「エ、いま／＼しい、大きに膽をひやしたと、やう／＼に心おちつき、縁先きへ出て見れば、なる程女が繻絆をとりこんでゐる。二人とも小用をして座敷へかへり、夜着ひきかぶりて

幽霊と思ひの外に洗濯の繻絆の糊がこはくおぼえた

始めて笑ひを催し、心おちつきてとろ／＼と一睡の夢を結ぶに、程なくや、
 家の鶏の聲、家毎にうたひつるゝ勇ましき、早出の馬の鈴の音シヤン／＼この
 明晩に御座らばナア、裏から御座れようウ、表／＼戸で音がするよウエ引
 馬ヒイン／＼、(鳥が板家根をつ／＼音)「コト／＼／＼」
 たさうな(と、北八も共に起き出れば、頓て勝手より膳も出て、急ぎ支度して立
 出づ、此宿に諏訪明神の社を拜みて)

梅干のすはの社ときくからに守らせ給へ皺のよるまで
 斯て若林の郷を打過ぎ、篠原の取付にて喜「オヤ、美味さうな牡丹餅がある、
 オット婆アさん一つくん、(と立ながら店先の牡丹餅を摘まんで、がつちり)
 喜「ヤア、こいつは食へぬ、ほまゝソレヤア、牡丹餅の看板でおざるは、喜「イヤ、
 ほんに木で拵へたのであつた、道理で硬い、喜「あ、いくつ進めます、喜「ナニ、三
 ツばかりくん、(と錢を拂ひ牡丹餅を食ひながら呼びかけ)喜「オ、イ／＼彌次

さん／＼、馬なんだ、うめえ物ならちつと呉れる、喜「ごうぎにうめえ、喜「ドレ
 一つ、喜「イヤ、それから御らうじる、(と手のひらへ載せてさしあぐると、馬が
 来り、ちよいと攪つて行く)喜「ハ、ハ、喜「いま／＼しい、こゝらの馬はみな
 下戸ださうな、と怨らめしさうに空を眺めて

あいた口ふさがれもせぬその上に鼻をあかせし馬のにくさよ
 程なく蓮沼壺井村を打過ぎ、舞坂の驛にいたる。之より荒井まで壹里の海上、
 乗合船に打乗り渡る。げにも旅中の氣散じは、船中思ひ／＼の雑談高聲に
 語り合ひ、笑ひのしり、打興じ行く程に、頓て半わたりて、乗合の人々も咄
 ぐたびれ、銘々柳行李に肘をもたげて居眠りをするもあり、又この風景に見と
 れて只黙然としてゐるもあり、(この乗合の中に、年の頃五十ばかりの梅むしや
 く／＼としたるおやぢ、いかにも垢づきたる布子を着たるが、何をか失ひけん、
 居眠れる人々の膝の下を搜り、又は薄縁をもち上げ、切にものを搜しもとむる

様子にて、彌次郎が袖の下をさぐり廻す、彌次郎その手を捉へて「彌、コウ、貴様は何だ、断りなしに人の袂をさぐつて何とするおやぢ、ハイ御免されまし、わしはハアちとべこ(少し許)なくなりましたものが御座るから 喜、おめえなくなつたものがあるなら断つて尋ねるがい、此船の中でどつこへも行くことではない、なんだ煙草入か、煙管か、おやぢ、インニヤ、そんなもんぢやア御座らない 喜、イヤ、そんなら銭か金か、おやぢ、インニヤ尋ねずと、もうよくござる 彌、尋ねずとよいものなら、人の居眠りをしてゐるうち、そこらア探り廻すことアねえ、のりあひなく「サアなにが見えぬ、云ひなさい、此中で物が見えないでは濟まぬ、おやぢ、インニヤ、もうよくござる 彌、ハテいしてはすまれえ、何が見えやせん、おやぢ、ハア、そんならいひますべい、みんなびつくりさつしやりますな 喜、ハ、ハ、ハ、おめえが物をなくしたとつて、誰がびつくりするものだ 彌、なにが見えやせん、おやぢ、アイ蛇が一疋なくなり申した 喜、ヤア、とんだことをい

ふ人だ、蛇とアなんの蛇だ、おやぢ、何だべいとつて、生きた蛇で御座るは、のりあひ「ヤア、く、く、 彌、イヤ貴様もとんだものを持つて來た、蛇をマア何にしようと思つて、喜、こいつは氣味の悪い、こゝらにはいぬか、(とたち騒げば、船中みなく、惣立に立ち騒ぎ)「ヤアこの板子の下にとぐるを巻いてゐるは、ソリヤそつちの方へ行つた、エ、こりや氣味の悪い、ソレ、明荷の下へ這ひ込んだは、コリヤまあ、とんだ人と乗合はした、(と船中上を下へひつくりかへし、立騒ぐ。かのおやぢ明荷をとり除け、蛇をなんの苦もなく掴み、また懐へ入れる)「喜、コレ、おめえとんだことをする、それを懐へ入れて置くと又這ひ出しますは海へ打つちやつてしまひなせえ、おやぢ、インニヤ、さてさうはなり申さぬ、わしはハア讃岐の金毘羅様へ行くもんだが、道中路錢に盡きて、すべい様がござらないから、道でこの蛇を取つたを幸ひ、蛇使ひになつて一文ツ、貰つて行くもんだから、コレヤアわしが商賣の種で御座るは、彌、イヤ、なんぼ貴様が商賣の

種だとして、蛇を持つてゐる人とうして一所にゐられるものだ、コレ船頭とん、なぜこんな者を船に乗せた。せんとろ「ハア、わしらどつて、よもやあの人が蛇を持つて居ようとは知りませぬ。のりあひ「コレ、おやぢどん、何の彼のと云はずとも多勢に無勢だ、早く打ちやつてしまひなせえ。おやぢ「インニヤ、ヤアだ、なり申さぬ。吾ならざア貴様ぐるめに海へ打込んでしまふがどうだ。おやぢ「オ、サ、はめるならばめて見さつしやい、わしにも手筋が御座るは。吾エ、此の親仁めはふてえ奴だ、(と北八立ちかゝつて彼の親仁の胸倉をとると、懐から蛇の頭がによつこり出る。北八さやつと言つて飛びのく。彌次郎つゞいて立あがり、煙管にて親仁を一つくらはせる、おやぢ腹をたて掴み付くと、船中みなみなとりさへるうち、又かの蛇が親仁の袂からおちてのたくり廻ると)みな「ソソリヤ、又出をつた、打殺るせく、(北八自分の脇差の鎧でちやつと蛇の頭を叩へる。蛇そのまゝ鞘にまきつきたるを、ちよいと海へ投げ擲げるはづみに、

手が迂り、脇差も一所に海へ打込みけるに、蛇は浪にまかれて見えず、脇差は竹光故浮きて流れる。北八面目なくしよけてゐる故、おやぢこれにて腹をいゝのり合皆々「ア、これでおちついた、しかしお氣の毒な事は貴方のお腰の物だ。おやぢ「わしは此としになるが脇差の流れるのを始めて見申した。吾エ、尻の穴の狭えことを云ふ親仁めだ、奥州の衣川で辨慶が立往生した時やア、太刀も鎧も流れたといふことだ。おやぢ「ハ、ハ、ハ、これやアハア横ツ腹が痛くなり申すは、柳橋といふ本に「ころも川さいづちばかり流れけり」といふ句があり申す、辨慶の差してお出やつた腰のものは金で拵らへたもんだから、流れべいことアござんないは。吾エ、云はせて置きやアよくしやべる死ぞこなひめだ、はりとはしてやらう(と又立ち上り掴みかゝるを彌次郎おし留め)「吾もう北八いゝにしや、乗合の衆の手前もある、静まれ、(と是をなだめる内、船ははやあら井近くなる)せんとろ「サア、お關所まで御座る、笠をとつて膝を直さ

つしやりませ、ソレ／＼舟が當りまするぞ、のりあひ「ヤレ／＼」滞りなく着いて目
 出度い／＼。(程なく船はあら井の濱につきければ乗合みな／＼舟をあがり、お
 關所を打ち過ぎける。彌次郎北八も船を上り)
 舞坂まひさかののり出したるは今切いまきりとまたいくひまもあら井にぞつく
 さるにても腰のものゝ流れたるは前代未聞ぜんだいみもんの噺はなしのたれと、みづから打ち笑ひ
 つゝ、きたハ
 竹篋たけべらを捨て、しまひし男ぶりごとくつぶしとはもういはいれまい
 それより二人は此あら井の宿に酒くみかはして足を休めぬ。

道中膝栗毛三編卷之下終

東海 道中膝栗毛四編卷首

217 首 卷 編 四 毛 栗 膝 中 道

女をんな方の阿佛あぶつ、立役たちやくの親行おんぎやう、十六夜いよひのよ日記にき、東關紀行とうくわんきぎやうの類、
 世よに行るゝ多おほなれど、皆下役みなげやく者の時代物じだいぶつ、壘つんぼ棧せき敷しきの耳遠みみとほき
 をいかにせん。此膝栗毛の世話せわごと事は、切落向きりおちむかひを専もつぱらとして、
 樂屋がくや落おちを不載のせず。北八、彌次、二枚の道外方ぢうげかたに東海道の引道
 具ぐを用ひ、今四篇いまよひにおよんで狂言きやうげんの筋すぢをかへず。見物けんぶつ猶跡なほあと
 幕まくの遅おそきに手を打つ事こと煩しきりなるものは、~~必~~作者さくしやの手柄てしづ、宿外しゆくぐれ
 の並木なみき氏うぢも、領分りやうぶん界かひの定杭ぢやうかう、是より右みぎに出でん事を競あそふべ
 し。嚮さきに野生やせい二番目にばんめに題だいして、一鞭いっぺん直たじに京城きやうじやうの大詰おほづめにいた
 るといへるものは、大帳だいちやうを不み見ざるの誤あやまりにして、此世界このよいまだ
 新井にいより桑名そうなまでの道行ぢやうぎやうに終りて、伊勢いせ參宮さんぐうのまはり仕掛しかけ、

大津街道の泥仕合は、五篇目の打出しに載せたり。嗚呼大儒先生、生前に文集の二篇目を出す事稀なるを、膝栗毛の四篇目、三年を不^す過^として製本既に成れるは、當^{あた}芝^り居^しの大名^{おほな}題^{だい}、三都會の評判記に貫通すべし。

文化乙丑春 前黄表紙著作 喜三二題于芍藥亭

東海膝栗毛四編卷之上

由^ゆ縁^{ゑん}齋^{さい}貞^{てい}柳^{りゅう}の狂歌に「螺貝^{らがい}の出でし昔は知られども今吹くはよき追風^{おひて}なりけり」と詠みしは、東海道^{あづまかいだう}に名たる今切の渡^{わたし}になん。そのかみ明應^{めいおう}の頃、山の奥より螺貝^{らがい}あまたぬけ出で、それより海上悪しくなりたりしを、元禄年中^{おほやけ}公の命によりて、海上に數萬の杭^{くい}をうち、蛇籠^{じやかご}をふせ、往來渡船^{わうらいとせんなんじやう}の難澁^{なんじやう}をすくひ給はりし 御惠^{めぐ}みの有難^{ありがた}さに、風和^{やは}らぎ、浪低^{なみ}くなりて、わたるに難なく、かの彌次郎兵衛北八、爰^{こゝ}を打ちわたりて、あら井の驛^{えき}に支度^{したく}整へ、名物の蒲焼^{めいぶつ}に腹をふくらし、休^{やす}みぬたるに、げにも來往^{らいわう}の貴賤^{きせん}絶え間なく、舟場^{ふなば}へ急ぐ旅人^{たびよと}は、足も空に出船^{でつせん}をよばふ聲につれてはしり、問屋^{とひや}へかゝる幸領^{さいれう}は口やかましく、課役^{くわやく}をふる、馬さしについて罵る。旅籠屋^{りやうりや}のはかまごし横ちよに曲げてはしり、茶屋女^{ちやゑめ}の前垂^{まへたれ}、筋かひに引きずつてとぶ。長持^{ながもち}人足横^{にんそく}にたつてうたひ、

馬士後をむきて、ひよぐりながら行く道すがら 四うらが性根は濱名のはしよ
 エ、今はとだえてエ音もせぬヨエ、ドウく茶や女お休みなさりませアしく、
 コレ馬士どんおいろ(下)し申さつせえよ 馬士オット旦那様ソリヤおつぷりが
 あぶんな(浮雲)いと、茶屋の軒下へ馬を引入れる。このからしりに乗りたるは、
 木綿の鼠小紋に、ひうちのところ、黒縹子をあてたるぶつきき羽織を着たるお
 侍、馬よりおりて、北八と彌次郎が休んでゐる向ふの床几に腰をかける。お
 茶あがりましと、茶をくんで来る。お侍女の顔をじろりと見たあとにて、茶
 碗を取り去モウ何時ぢやらう 女九ツ半でもおざりましよ 馬士きんによう(昨
 日)の今時分ぢやろかい 去支度致さう、何ぞあるか 女おなぎの蒲焼がおざ
 ります 去なんぢやお内儀の蒲焼か 馬士御亭主のすつぼん煮はないかな、ハ
 、、、時に旦那様、お荷物は是に置きます、お小づけが丁度五ツ 去その貫ざ
 しはこれへたもれ 馬士ハイく、モシ旦那様ちとお願ひがおざります、へ、

、、、、どうぞ御酒を一杯たべたうおざります 去ホウお身、酒が好きか 馬士ハ
 イ飯よりは好きでおざります 去遠慮のない事ぢや、勝手に飲みやれ、身ども
 たべうすならば、振舞はうものを、かいもく下戸ぢやから是非がない 馬士ハ
 ア旦那はあがらずとも、ハイどうぞ頂きたうおざります 去ハ、ア解せた、お
 身酒手をくせと云ふのぢやな、イヤまかりならんぞ、道中御定法の賃錢ども相
 拂つてまかり通る、別に酒手なぞといふことは決してならん事ぢや 馬士左様
 ではおざりますが、どうぞそこを 去イヤ達てと云はどつかはさうが、請取書
 をしやれ、身共歸國の節、問屋どもへ相届ける 馬士いつたい殻尻のお荷物に
 は、重すぎてゐるから、どうぞ御了簡なされまして 去しからばソレ八錢も遣
 はさうと、貫ざしより八文ぬいてやる 馬士ハイせめて十六文下さりませ 去し
 からば身共了簡のもつて、今四文遣はさうと(せに四文はうり出してやる。馬
 士ふせうぐに取つて馬を引きゆく) 去コリヤ待てく、南無三寶、あやつも

う何處へか行きをつたさうな。身共大切の草鞋を馬につけておいたが、持つて行きをつたさうぢや、残念な、江戸まではかれる草鞋ぢやものを(とぶつく)小言をいふを、北入をかしく、「モシ貴方は江戸へお下りでござりますか 主左様く 喜今承りますれば草鞋一足を江戸までおはきなると見えましたが、けしからず道がお上手でござりますの 主イヤ、身共手作にいたいた草鞋ぢや程に、一足あるといつも江戸迄行戻りはきをります 彌ほんに草鞋の切れるは歩き下手でござりますが、貴方は道がお功者なことだ、しかし私も此草鞋は一年前松前へはいて参つたが、歸るまで何ともござりませなんだから、しまつておいて、去年長崎へもはいて参るし、そして又今度はいて出ましたが、御らうじませ、まだ何ともござりませぬ 主はて扱、お手前は身共より道が功者ぢや、如何致せばその様に久しく草鞋がはかれますな 彌ナニサ草鞋は履き詰めにしても切れませぬが、その代り私はどうも脚半が切れてなりませぬ 主それはど

うして 彌私は旅へ出ますと馬に乗りづめに致しますから 喜おきやアがれ、ハ、ハ、彌サア行かう、貴方御ゆるりと、アイお世話(とこ)の勘定をして立ち出で、此宿はづれより二人ともふた川までの駕をとりて打のり行く程に、はや高師山、はしもとの北に見ゆれば、彌次郎兵衛例の狂歌を口すさむ(とび) 喜がうむ高師の山の冬はさぞゆきに眞白く見違へやせん 此邊にて向ふより来る二つの駕籠に行き合ふ、二つのかどかき「どうぢや親方かへていかずに、こちのかどかき「なんぼおこす 主たがは「げんこやらずに、それでいぢやござい こちのかど「まよ棒組まけてやらアす(と)、かこの相談てきて兩方の駕舁(かどかき)「旦那様方、駕を換へますから乗換へて下さりませ 喜ふた川まで打越したが、いゝか、(と此内ふた川の駕にのり来る男、こちらの駕にのりかは) 換れば、北入も彌次郎もさきの駕にのり移ると、北入を乗せたる駕舁(かどかき)「旦那は仕合ぢや、ユリヤア宿屋駕でおざりますから、蒲團が敷いてあるだけ、お前方

は換へさしやつたがお徳と云ふものぢや、喜ほんにさうだ、べといひつゝ駕に下敷の蒲團高くなりぬたるに心つき、何心なく蒲團の間を探り見れば、四文錢一本あり。さては今まで乗つて来た男が、爰に置いて忘れたと見えた、何でもこいつせしめうるしと、北八そつと彼の一本をおのが懐へ着服して、そ知らぬ顔をしてゐる、この内早くも白須賀の驛に至る。這入口の茶屋女表に出てよびたつるを見て彌次郎兵衛)

出女の顔のくろきも名にめでし七なんかくす白須賀のやど

此宿を打過ぎ、程なく汐見坂にさしかゝるに、これなん北は山續きにして、

南に蒼海漫々と見え、絶景誠に云ふばかりなし。

風景に愛敬ありてしほらしや女が目元の汐見坂には

北八かく口ずさみたるを、かこの先棒聞きつけて「ハア旦那は偉い歌人ぢや

な、アレ向ふの山を見さしやりまし、鹿がぬをりますは、喜ドレ、是は面

白い「さきほう」めいよふ、お江戸の旦那方はあんな面白うもない畜生めを珍しがらしやつて、きんによう(昨日)も發句とやらをいはつしやれたお人があつた。喜俺も今の鹿で一首よんだ、貴様たちに云つて聞かせたとつて、馬の耳に風だらうが、かういふ歌だ「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき」なんと奇妙かく「あさほう」だんなは偉いものぢや、わしどもは皆目知らぬが、なんにしされ、歌が直にひゆつと出るといふものぢやから、えらい〜「喜一寸した所が此位なものよ、イヤ貴様たちあんまり讚めてくれたから、酒が飲みし度なつた、爰は建場か「さきほう」さるが番場でおざりきす、サア棒組、一服吸つて行かアず(と、茶屋の角に駕をおろし休む)喜みんな一盃ツ、飲まツし、コレ女中そこへ酒を一升でも二升でもうめ(味)え肴をつけて出してやつてくんな(彌次郎兵衛かこの内にて)「喜」オヤ北八どうした、でえぶ(大分)大風なことを云ふな、喜ナニサ、ちよつと飲ませるが、何處でもこの位なものだ(と、先程拾ひ

し四文ぜに一本をだして見せかける。彌手めえそれをみんな奢おごか。真知れた事よ。面おもしろえ、おいらも御馳走みせこにならうと、彌次郎駕かを出て店頭みせにすわると、やがて女が酒さかなもち出る、きた八を乗せたる駕かのさきぼう。「これは有難うござります、旦那頂たまきます、コリヤ〜棒組、どこへいつた、ヤイみんな來されの、さつきの猿丸さるまる太夫様たゆうさまが御酒を下されるは」と、かこかき四人寄りこぞりて飲みかける。彌次郎もをかしく、おもいれのみかける。北八は一番へこまされてだんまり也。彌サア〜御亭主おんていしゅいくらだの、御酒代は駕かの旦那だんながお拂ひだ亭主ていしゅ「ハイ〜酒と肴で三百八十文でござります、真コリヤこうてきに〜らやアがつた」とふせう〜にかの錢を拂つてしまふ。かこかきこゝろづき。「ヤ、ほんに棒組、先刻さつぎの一本の錢ぜにはどうした。ぼうぐみオ、それ〜モシ旦那だんな、あなたの乗つてござらしやる蒲團ぼたんの間に、四文錢ぜに一本入れて置きました、有るか見て下されませ」と、いはれて北八びつくりし。「ナニ爰こゝにか、イヤ見えないわえかこ

かき「ナニ無ないことはあらまい、慥たしかに入れて置きました。真さつき見りやア北八手めえが蒲團ぼたんの下から出して、ひねくりまはしてぬた錢ぜにぢやアねえか。かこかき「それでおざります」と、北八心のうちにいま〜しいことをいふと彌次郎を睨にらむ。彌次郎をかしく、傍わきのほうをぐつとふりむいてゐる、と北八仕方なく懷ふところより一本だして蒲團ぼたんの下へそつと入れ。真オ、〜、爰こゝにあつた〜。かこかき「サア棒組ぼうぐみ、この元氣げんきでやりからかさう茶ちや、ようござりました」とかこを昇かきいだす、彌次郎をかしく、こゝは猿さるがばんばにて、柏餅かしはもちの名物なぶつなれば。ひろうたと思ひし錢ぜには猿さるが餅もち右みぎから左ひだりのさげにとられた。かく打笑うちわらひて行く程ほどに、境川さかひがはといふに至る。こゝは遠江三河の境さかいで、橋はしあり。彌次郎地口ぢぐちにてよめる。遠州へつぎ合せたる橋はしなればにかはの國くにといふべかりける。程ほどなくふた川の驛はしに着く。此こゝとこ家毎いえごとに強めしを商あきなふ見ゆれば

名物はいはれどしるきこはめしやこれ重宮のふた川の宿

両側の茶屋毎に、旅人を見かけて呼びたつる。女お休みなさりまアし、あつたかなお吸物もおざりまアす、無鹽の肴で酒でもお飯でもあがりまアし、(此茶屋の門口にゐる雲助、喜多八彌次郎を乗せたるかごかきをよびかけて)彌次郎ア八兵衛、かへてうせたな、畜生め、早ういて喚が番をしされ、密夫めがしけこんでけつかるは、(彌次郎をのせたるかごかき)「阿呆め、おどれ(己)が所の親父めが首釣つてをることア知らずに、糞たれめ、ハ、ハ、ハ、(と、こゝを行過ぎる。間屋の少し手前にかごをおろす。彌次郎兵衛北八こゝよりおりてゆくと、此宿はいづれの殿様にや、お小休と見えて、御本陣の前に乗物たてつき、あまたの御同勢はせちがひ、間屋袴ごしをねぢりてかけまはり、野袴ふんごみのお侍衆、御本陣へ相詰めるを見て)「吾ハ、アお屋敷だけ大屋様も二本さしてゐるな。彌次郎馬鹿アいふな、踏込さへはいてゐると、大屋だと思つてけつかるさうだ。彌次郎

ノ乗かけを見な、こゝろぎに蒲團が重ねてあらア。彌「その筈だ、乗つてゐる人の天窓を見や、叶福助といふもんだ、ハ、ハ、ハ、ハ、ソレ馬が來たア。馬、ヒ、ハ、ハ、彌「アイタ、ハ、ハ、ハ、ハ、わりい所に合羽駕を置きやアがる(と、けつまづいて小言をいふを、お雇の中間ていに見ゆる男)「コノ野郎め、合羽駕へ土足を踏みかけやアがつて、ふてえ事をぬかしやアがる、横ッ顔アかぶりかくぞ。彌「ハ、ハ、ハ、ハ、おはえやまめしどき。彌「大江山の飯時ぢやアあるめえし、煩アかぶりかくも氣がつえ。中間「何だ、こいつぶちはなすぞ。彌「きさまたちの赤鬮でナニ斬れるものか。中間「さうぬかしやア切らにやアならぬ、コリヤ角助お身の腰の物を一寸借しやれ(と、朋輩のかく介が腰の物をとりにかゝる)かくすけ「コリヤ、切らぬならば、お身の刃物でなせ斬らぬ。中間「ハテやかましい、どれできつてもいゝぢやアねえか。かくすけ「イヤよくない、中間「ハテ容い男だ、一寸貸しやれな。かくすけ「イヤさておぬしも氣のきかぬ男だ、おれが本統の脇差は槍持の樋右衛門へ二百のかたに取られたを、お

身様も知つてゐるぢやアねえか 中問「ホンニさうだ、エ、ユリヤ、おのれ打果す奴なれど、許してくれう、早くいけ 彌「イヤいくめえ、サア切れ〜」とつつかゝる。皆々此喧嘩をかしがりて引分もせず見物してゐると、かのお中間「エ、さうぬかしやア了簡がならぬ、突殺してなとくれうと、引抜いてつきにかゝる竹みつを、彌次郎ひつゝかんでれち倒せば、件の男」中問「ヤアレ人殺し〜」と此内はや殿さまのお立と見えて、おさへの拍子木「カツチ〜」(そりやおとも揃へと騒ぎたつ、御同勢につれて喧嘩も夫ぎりと成る。彌次郎兵衛もこれ幸に北入諸共、ののがれて、足早に行過ぎる) 彌「ハ、ハ、ハ、ハ、大笑の喧嘩だわきざしの扱身は竹と見ゆれども喧嘩にふしはなくてめでたしそれより此宿を出てたどり行くに、早くも大岩小岩を打過ぎ、岩穴の観音をふし拜みて

行がけの駄賃に拜む観音も尻くらひとは岩穴のうち

げにも旅のききさんじは差合くらす高聲に咄しものしてゆく内にも、さすがに退屈の欠しながら 彌「ア、草臥れた、ちつとばかりの風呂敷づゝみや紙合羽もなか〜邪魅になるものだ、コウ彌次さん、おめえの荷とわつちが荷を一所にして坊主持にしようぢやアねえか 彌「コリヤアおもしろえ、幸こゝにいゝ竹が捨てゝあると、拾ひ取りて二人の荷物を竹の先にくゝりつけて 彌「サア〜北八、手めえから持つてこい 彌「歳役におめえ始めさつせえ 彌「そんなら狐拳でやらう、サアこい、ヒイ、フウ、ミイ、おつとしめた 彌「エ、いめえましい(と、ひつかたげて行く、向ふから来る旅僧は法華宗と見えて) そうだぶ〜だぶだぶ〜、フニヤ〜〜〜だぶ〜〜〜 彌「ソリヤ彌次さん渡したぞ 彌「オット受取つたりや、其つぎの坊様はどうだ、早く來ればいゝに(と又向ふより来るのりかけ馬の鈴の音)「シヤン〜〜〜 彌「高い山から谷底見ればエ、おまんかわいや布晒す、ナアエ、どう〜 彌「來たぞ〜、

お繪符は勅願所、ソレ馬の上に御出家、よしか、喜あんまり早いな（と受取
つてひつ擔ぎ行く道の傍にぬざり）「御らんの通り足の叶はぬ壁に御報謝、喜イ
ヤアこいつ坊主だ一文やれ、彌まへから見ると坊主のやうだが、後を見や、ぼ
んのくぼに毛があるは、喜置きやアがれ、ハ、ハ、ハ、（此内あとより比丘尼が三
人連にて指につけし管をならしてうたひ來る）「身をやつす賤が思ひを夢程
さまに知らせたや、えいそりや夢程さまに知らせたや、サアサ、さんがらへく
喜鮮かな聲がする（と振返へり）「ヒヤア比丘尼だく、サア彌次さん渡しや
す、彌エ、いめえましい、喜人に荷を持たせるは中くいい物だ、これでお供
を連れたい持た、ヤアくこいつらアまんざらでもれえ、彌次さん見れえ、こ
ちらの比丘尼が、おれを見て、アレいつそこにこくと愛嬌が溢れるやうだ、畜
類め、彌愛嬌のいゝのぢやアねえ、アレヤア顔にしまりのれえのだけは、喜悪く
言ふぜ（と此内後になり前になり行く比丘尼はまだ年も廿二三、今一人は年増、

十一二の小比丘尼ともに三人づれ、中にも若い比丘尼がきた八のそばへよりて）
「モシあなた火はおざりませぬか、喜アイく今打つてあげやせう、（とすり火
打を出してかちく）喜サアおあがり、時におまへ方ア、どけへいきなさるびくに
「名ごやの方へ参ります、喜今夜一緒に泊りてえの、なんと赤坂迄行きなせえ、
一所にしやせう、びくにそれは有難うおざります、モシどうぞお煙草を一服下さ
りませ、とんと買ふのを忘れました、喜サアく、煙草入を出しな、みんな上
げよう、びくにそれでは貴方お困りでおざりましよ、喜サニわつちアよしき、時
におめえ方のやうな美しい顔で、なぜ髪を削りなかつた、ほんにさうして置く
は惜しいものだ、びくに「ナニわたしがたとへ髪が有つたとて誰も構人はおざり
ませぬ、喜あるだんか、わつちらア一番にかまふ氣だ、なんと構はしてくんな
さらんか、びくに「オホ、ハ、ハ、喜早く一所に泊りてえ、彌次さん此さきの宿へも
う泊らうぢやアねえか、彌馬鹿アぬかせ、あやにく坊主の來るがと切れた（と、

小言云ひながら行くほどに、火うち坂をうちすぎ、二軒茶屋にいたると、此所より比丘尼はわき道へはへる（喜）喜コレく、おめえたちやア何處へ行く、そつちぢやアあるめえ（喜）喜ハイ是これからお別れ申します、わしどもはこの在郷さいかうへ廻つて参りますから（と）、野道をさつくと行過ぎる。北八あきれて見送ると、彌次郎をかしく吹出し（彌）彌ハ、、、北八手めえ今日はてえぶ（大分）つけがわりいぜ 喜エ、とんだ目に逢つた、こうはらな（と）、うつかりしてゐるうしろから、ばつたり行きあたる往來の人（喜）喜アイタ、、、目を明あいて通とほれ、だれたとぶりかへり見ればたび僧 彌オツト荷物渡したく 喜コリヤはじめられえ（と）、ふせうぐに荷をひつかたげゆくまゝに、やがて吉田の宿に至る。
（旅人をまねく薄のほくちかと爰もよし田の宿のよれたち）

此宿はづれより遠國道者とは見ゆれども、少しきいた風、しやべる手合五六人、高聲に咄して行くをきけば、中にもめみきの縦縞たてじまに肩の所縞柄しまがら變りたる切

れをあてたる裕をひつぱり、風呂敷包いとたてと糸桶いとたてを背負ひし男、あとの方をふりかへりて「オ、イ源九郎義經よしつねヤアイく、早く來さいのく（と）呼ぶ聲に彌次郎北八をかしく、この義經と呼べる、男をみれば、紺の紋むすねつきの廣袖ひろそで裕あはせにこれも包みといとだてを背おひ、顔は大あばたにて、少し片小鬚かたこひんは禿はげたる男（か）かめ井せなア（兄）ヤ片岡かたをかせなア（兄）は、やくと足が達者だアのし、うらアあくとのあかぎれさアへ、石ころがつゝばいつて、歩かれ申さぬかめる「静御しづかごぜんはどうしさつたアのし、よしつね「ヤレきんたまきて聞きなさる、あとの建場たてばで靜御前しづかごぜんが持病ちびやうの疝氣せんきさア起つたと、金玉きんたまノウつりあげてうつちぬ（死）べいと、あげへこげへ（西風）東風とうふうに騒さわぎやることよ、それにハア六代御前ろくだいごぜんが牡丹餅ぼたんもちさア三十べし（計）もうち食くつたげで、食傷しよやうのウして、じたんばたん、せつながりやる、まんだそれに辨慶べんけいは園子くしの串くしさアで咽笛のどぶえのツつのどぶえいたと、涙アこぼして泣きやつたげで、うらが新家にいやの知盛ちのりどのが、三人のウ介抱うけかかして、やらやつとあとからつるん（連）

で來申すは、にし(主)たちやアあに(何)も知らずにうつばし(走)つて仕合だア
 のし、(彌次郎)この咄しををかしく、まとなりさきになりて、「おめえがたアど
 け(何所)へいきなさる よしつね」お伊勢さまへ参り申すは、彌さつきから聞けば、
 おめえ方ア、義經だの、辨慶だのといひなさるが、どういふことたね よしつね「
 ハアそなた(其方)衆の聞きやつたらをかしかんべい、コリヤハアわし共が國さ
 アつん出て來る前に、祭禮があり申して、千本櫻といふ芝居のウし申したから、
 それでハア義經だアの辨慶だアのと、狂言さアおつばじめた時、忘れない様に
 と、その名をやつべし云ひ付けた癖さア、今でもおどけ(戯)に云ふのでおざる
 は、彌聞えやした、そんならおめえは義經になつたお方と見える よしつね「さう
 でおざる、其前にわし共が國さアへ江戸芝居が來て、天神様の狂言のウし申し
 たが、聞きなさる、たまげたりくづ(理窟)よ、あにがハア、時平とやら五兵衛
 とやらいふ悪人どのが讒言のウせられたけて、天神様の鳥流しにならしやます

時、輿に乗つてお出やると、あにがハア見物のウしてをる婆様達もかつ(囃)様
 達も、ヤレくいとしばいこんだと、涙アこぼして、御門跡様の通らしやます
 様に、米だアの錢だアのと、舞臺さアへ蒔き散らかいて悲しがりやる、そこで
 ハア見物の中から博勞の與五左といふづないふと(無上人)が舞臺さアへ駈出い
 て云やるにやア、此芝居アならないぞ、あぜ天神様ア鳥流しにせるのだ、
最前お出やつた長樂寺様の閻魔様ア見る様なお公家どのが悪人だア、あにも天
 神様に科アない、如何に芝居だアとつて、ふと(人)を馬鹿にしたこんだア、天
 神様のしりやア此博勞の與五左衛門がもつは、時平どのはうらが相手だと、あ
 にハア御年貢米の二俵べしもさしやアげ(差上)る力のあるせな(兄)アだんて、
 誰もうつたまげて挨拶のウせるふた(人)アなし、見物もくちやうと(口々)に
 與五左殿さうだ、その時平とやらアしよ曳出して、ぶつたけと、あにハア村
 中の若いふと(人)達が、樂屋さアへ刎れこんで、らんごくをやると思ひなさる、

さうせると江戸役者の時平どのは、コリヤたまらないと、尻のウおつげしよつて、つんぬげ(逃)申した、それからハア名主どんへ寄合つけて、もう此村へ江戸役者ア入れさるなど談合のウして、わしどもが其跡の芝居さアで狂言のウおつ始め申したが、江戸芝居よりかアぶちられる程はやり申した(と、息せいはいつての間はず語り自慢らしく話しても行くまゝに、何時の間にかは大雲寺に至る。この所は甘酒の名物なれば、彼の人々は打ちつれて此茶屋にやすむ。彌次郎北八は急ぎこゝを打過ぐるとて)

いやたかき御寺の前の名物は是も佛になれしあまざけ

斯くて此あたりより早日も傾き暮るゝに近ければ、いざや急がんとて草臥れし足を早めて通り行く道すがら、尋なうだ彌次さん、埒があかねえの、彌次大きに草臥れた、尋なんと昨宵の泊りは中位な宿で有つたが、今夜は斯うしやせう、赤坂まで俺が先へ行つていゝ宿を取りやせう、お前草臥れたなら後から靜に來

なせえ、宿から迎の人を出させておきやせう、彌次それよからう、しかし宿はどうでもいゝから、たぼ(女)のあり相な内にしやれ、尋のみこみ山く(と、此ところより駈抜て先へゆく。彌次郎あとより通りゆくに、程なく御油の宿に入りたる頃は、はや夜に入りて、兩側より出てくる留女、いつれも面を被りたる如く塗りたてたるが、袖を引いてうるさければ、彌次郎兵衛やうくと振りきり行き過ぐるとて)

その顔でとめだてなさば宿の名の御油るされいと逃げて行かばや

彌次郎兵衛あまりに草臥れば、先づ此所はづれの茶店に腰をかけたるに、主の婆々「アイ茶ア参りませ彌次、モシ赤坂迄はもう少したの、ほごアイたんだ十六丁おざるが、お前一人なら此宿に泊らしやりませ、此先の松原へは悪い狐が出をつて、旅人衆がよく化され申すは、彌次それア氣のねえ咄だ、しかし爰へ泊りたくても、連れが先へいつたから、仕方ねえ、エ、きついことアねえ

やらかしてくれう、アイお世話（と、茶代を置き、此所を立出て行くに、暗さは暗し、うそ氣味悪く眉毛に唾つばをつけながら行く。はるか向ふにて狐のなく聲）
 「ケン引く」彌彌ソリヤ鳴きやアがるは、おのれ出て見る、ぶち殺ころしてくれう
 （と、りきみかへつて辿り行くに、北八もさきへかけぬけ、此所迄來りしが、これもこゝへ狐が出ると云ふ咄うたを聞きて、もしもばかされては詰らぬと、彌次郎を待ち合せ、連立ち行かんと思ひ、土手に腰をかけ、煙草呑みぬたりけるがそれと見るより）喜喜オイ／＼彌次さんか彌彌オヤ手めえ、なぜこゝにゐる喜喜宿とりとに先へいかうと思つたが、爰へは悪い狐が出るといふことだから、一所にいかうと思つて待ち合せた（といふに彌次郎心づき、こいつきやつめが北八に化けたなと思ひければ、わざとよわみを見せず）彌彌くそをくらへ、そんなでいぐのぢやアねえは喜喜オヤおめえ、何を云ふ、そして腹がへつたらう、餅を買つて來たから食ひなせえ彌彌馬鹿アぬかせ、馬糞げふんが食らはれるものか喜喜ハ、

、おれたはな彌彌おれだもすさまじい、北八にその儘だ、よく化けやアがつた、畜生め喜喜アイタ、彌次さんコリヤどうする彌彌どうするもんか、ぶち殺すのだ（と、うっかりした所をぐつと突倒して、彌次郎その上へ乗り懸りおさへる）喜喜あいた／＼彌彌痛かア性體しやうたいを顯はせ／＼喜喜アレサ尻しりへ手をやつてどうする彌彌どうするもんか、尻尾しつぽを出せ、出さずば斯うする（と、三尺手拭を解き、喜多八が手を後へ廻して縛る、きた八をかしくわざと縛られてゐると）彌彌サア／＼さきへ立つて歩け／＼（と北八をく／＼り、後か捕らへておつたて／＼、あか坂の宿に至る。早いづれのはたごやにも、客をとめて、門に立ちゐる女も見えず。彌次郎は宿から迎ひの人がもはや出さうなものとうろつく内）
 喜喜コウ彌次さん、い／＼かげんに解いてくん、外聞げいぶんのわりい、人がきよる／＼見てわりいわな彌彌エ、くそを食らへ、ハテ宿やどは何處だしらん喜喜ナニおれはこゝにゐるものを、だれが先へ宿を取つて置くものだ彌彌まだ吐ぬかしやアが

るか、畜生め（此内向ふより来る宿屋の男）「あなた方は當宿 お泊りではおざりませぬか 彌「きさま迎ひの人か やどや」ハイお左様でおざります 彌「それ見たか此ばけ損め（と、北八を杖にて一つくらはせる）喜「アイタ、、、、、どうしやアがる（宿屋の男膽をつぶし）あなた方外のお連れ様はまだお後でおざりますか や」ナニもうわつち一人さ やどや」ハア夫ては間違ひました、私方のお泊りは十人様ちやと承りました（と、此男はそうく行過ぎる。また或るはたこやの店さきにて）喜「お泊りかなもし（と、駈け寄つてとらまへる）彌「イヤ連れの者が先へ来た筈だが 喜「その連れはおいらだはな 彌「エ、いけしぶといやつだもういゝかげんに尻尾を出しなれ、イヤ待てく、あそこに犬がある、コ、、、、シロコ、、、、オ、シキ、オ、シキく、、ハ、ア犬が来てもいけしやアくとして居るから、さては狐ではねえ、ほんとうの北八か 喜「知れた事、わりい酒落だ 彌「ハ、、、、サアおめえの所へ泊りやせう（と、心解けて北八がい

道

ましめを解くと、宿屋のてい主「サアお這入りなさりませ、ソレお湯をとつてこい、お座敷はえいかな 喜「ア、とんだ目に逢つた（と、脚を洗ふ、此うち宿の女荷物を座敷へ運ぶ、二人も座敷へうち通りて）彌「ホンニ北八了簡しや、おらア實にほんとうの狐だと思ひ詰めた 喜「馬鹿くしい目に逢つた、いまだに手首がびりくする や」ハ、、、、併し待てよ、斯はいふものゝやつぱりこ此 されてゐるのぢやアねえか、どうやらをかした心持だ（と、むしやうれがばか 喜「主「ハイお呼びなさいましたか 彌「コレどうも合點がに手を叩き」喜「主「ハイ赤坂宿でおざります、喜「ハ、、、、彌次さん行かぬ、爰は何處だ だはぐらかして居やアがる（と、いひつゝ眉毛をぬどうしたのだの 彌「エ、ま、の内は卵塔場ぢやアねえか 喜「エ、なによナらして」御亭主さん、なんとこい へく（と、此内勝手より宿の女）喜「おおつしやる 喜「ハ、、、、おもしろい 湯にでも入つて氣をおちつけるが湯におめしなさりませ 喜「サア彌次さん先づ

いよ、御畜生めが、糞壺へ入れようと思つて、その手をくふものか、亭ナニ湯は清水でおざりますから奇麗におざります、マアお出でなさりませ（と、勝手へ行く。女茶をくんで來たり）「モシ御淋しかア女郎さん方でもお呼びなさりませ、馬鹿云ふな、石地蔵を抱いて寝ることアいやだ、ホ、ホ、ホ、いなことをおつしやります、亭そんなら先へ這入りやせう（と、北八湯殿へ行く。此内亭主又座敷へ出て來り）亭ときにお客様へ申上ます、今晚は私方にすこし祝ひ事がおざりますから御酒を一ツあげませう（と、いふうち、勝手より酒さかなもち出る）亭お構ひなさるな、なんぞお目出度ことかの、亭ハイ左様でおざります、私の甥めに嫁を貰ひました、今晚婚禮を致させますから、おやかましくおざりませよ（と云ひすて、立て行く。北八風呂より上り）亭何だ奢りかけるの、亭この内に婚禮があるといふことだ、コリヤ愈々彼奴めがはぐらかすに極まつた、もう水風呂へも這入るめえわえ、亭エ、おめえもいゝ加減にしな

去りとは執念深えこつた、亭イヤくめつたに油断はならぬ、この硯蓋も、んなに甘味さうに見えても、性は馬の糞や犬の糞だらう、亭ホンニさうだらうからおめえは見ておなせえ、こいつは有難え、お辭儀なしにやらかしやせう（と、北八手酌にてさつくと飲みかける。彌次郎例の意地がきたなく、流石に見てもおられず、まじくして）「いめえましい、氣を悪くさしやアがる、亭氣遣えはねえ、一杯飲みなせえ、亭イヤく、馬の小便だらう、ドレ匂ひをかきして見せや、ムウく、これやア本統のやうだ、どうもこらへられぬ、ア、まよ、やらかせ（と、一杯ついで飲み、舌打しながら）「酒だく、ドレく着オツト此玉子はどうも色合が氣にくはねえ、海老にしよう、カリくく、こいつは本統の海老だく（と、ひつかけく、さいつおさへつ、さつくと飲みかける。此内勝手の方は梳家具の音、がたびしと騒がしく、とりこみ最中離れ座敷には、はや婚禮の盃ごと始まりしと見えて諺の聲する「四海波靜かに

て、國も治まる時津風、枝を鳴らさぬ御代なれや、あひに相生の松こそめてたかりけれ 喜「ヤンヤア 喜「コウ 喧しいわえ 喜「喧しいはい、が、おめえ先刻から 盃を放されえ、ちつとこつちへ廻しな、ホンニ馬の糞だの小便だのと云ふかと思やア、やみくも一人で喰ふやつさ、ハ、、、 喜「おらア正直化された氣になつて居たが、今思やア、さうでもれえ、とんだ苦勞をさせやアがつた 喜「エ、おめえの苦勞したよりかア、おらア縛られて、へんちきな目に逢つた、ハ、、、(と、此内勝手より膳も出で、かれこれするうち、奥の座敷にて又諸うたふ)「千代もかはらじ幾千代も、榮え榮ゆる松梅の、ふたばの竹のよをこめて、老となるまでと結ぶぞ樂しかりける、めでたい、三國一の姫をとりすました、しゃんくく(と手を打ち叩き、さどめきわたる。此内勝手より女來り)「あなた方もうお床をとりましょか 喜「そんなことにしやせう 喜「コレ女中、祝言はもう濟みやしたか、さだめて 喜「御は美しからう 喜「アイサ、賀様も

美しい男、 喜「御様もえらい姿色よしておざります、お氣の毒なことは、あちらの座敷に寝やしやりますから睦言が聞えましょ 喜「なんだそんな手合と割床はあやまる 喜「こいつは大變く 喜「モウおしづまりなさいませ(と出て行く。二人もそのまま寝かけると、はやふすま一重隣の座敷に賀と姫が寝る様子、ひそくと談しするを聞けば、下地からいることにて貰ひし姫と見えて、なか／＼初対面とは見えず、ぶつたり掴つたりして、いちやつく様子、手にとるやうにきこえ、彌次郎兵衛北八は寝もやらず 喜「エ、とんだ目に逢はしやアがる 喜「ホニわりい宿をとつた、人の心も知らずに、なんだか恐ろしく睦じいな、畜生め 喜「サア談し聲が止んだからむづかしい(と、だん／＼蒲團からのり出して隣の様子をきき耳立て、寝られぬまゝに彌次郎そつと起きたち、襖の隙間からさし覗く。北八も裸のまゝ這ひおきて) 喜「コウ彌次さん、姫は美しいか、おいらにもちつと見せてくんない 喜「コリヤしづかにしや、肝心の所だ 喜「ドレ／＼

見せねえ 舞アレサひつばるな 舞それでもちつと退きなせえ(と、彌次郎が夢中になりて覗きぬるをひきのけんとひつばれども、退かじといぢばるはづみに、ばつたり袂があちらの間へ倒れると、二人も共に袂の上へころげる。舞も舞もおしにうたれて、きもをつぶし むこあいたくく、コリヤどやつぢやい、なんぜ唐紙を打こかいた(と、はれおきた所が、行燈もひつくりかへしてまつくらやみ、彌次郎はちやつと逃げて、おのが寢床へ這ひ込む。北八まこくして、かの舞につかまさり、詮方なく) 舞御免なせえ、手水に行くつて、ツイ戸まどひをしゃした、ぜんてえこの女中がわりい、夜座敷のまん中に行燈を置くから、それに蹶つまづいてお氣の毒だ、ア、小便が漏るやうだ、ちよつといつて来やせう、こゝを放してくんなせえ おこいやはや、呆れたお人達ぢや、夜着も蒲團も油だらけになつた、コリヤおさんく、だれぞ早うおこしてくれぬか(と、呼びたつる聲に、勝手より下女が火を點して来り、そこら片付

けるに、北八も手持なく、はづれし唐紙をはめてひきたて、やうく(と)ことわりいうて、もとの寢所へかへり、すこくと寝かける。彌次郎をかしくふき出して)

寢て聞けばやたらをかしゃ唐紙と共にはづれしあこのかけがねきた八も夜着うちかぶりながら

舞姫のねやをむせうにかきさがしわれは面目うしなひしとて
斯くうち興じて、夜もふけゆくまゝに双方しづまり、只舞姫の聲のみたかくなりぬ。

道中膝栗毛四編卷之上終

東海道中膝栗毛四編卷之下

鷄ばんこの聲萬戸ばんこに響きて、ひきつる、課役くわやくの馬の嘶しき勇ましく、既に夜明けしれ
 ば、彌次郎兵衛北八も起出あらして、大略ししたくに支度整へ、早くも赤坂あかさかの宿しゆくを立ち出いでてける
 に、此宿しゆくの出端でばなより後あとになり先まきになり行く三人りよじんづれの旅人、是も江戸ものと
 見えて、少し勇み肌はだの捲舌まきじたにて談し行くを聞けば、一人の男おとこ、コウ昨宵ゆうべの泊とどはをか
 しかつたなア、今一人いまひとりソレヨ、なんだか奥の間に泊とどつてゐた奴等やつらア氣いきの利きかれえ
 野郎どもだ、宿に婚禮こんらいがあるを羨うらやましがりやアがつて、襖たもとの間から覗のぞきをつて
 夢中むちゆうになり、とうとう襖たもとをぶつこかしやアがつた、大笑おほいひな筥へら棒ぼうどもだ、今一人いまひとり
 それからその聲こゑに謝あやまるさまア、あの騒さわぎでおいらも碌ろくに寝ねられなんだ、いめえ
 ましい一人男ひとりおとこ、そしてアノ一人の野郎やろうめはなんだか宵に宿の亭主ていしゆを呼びやアがつ
 て、このうちは卵塔らんたふば場ばぢやアねえかと云やアがつたが、あの筥へら棒ぼうめはどうで

も氣が狂れてゐると見える（と、此てやひ、ゆうべ彌次郎北八が泊りし内に一所に泊つたと見えて、此咄しなする。彌次郎聞きて大きにあつくなり、足早にかけより、詞をかけ）彌「コレ貴様達やア先刻から黙つて聞いておれやア、おいらがことを籠棒とア、なんのこつた。さきの男「ナニ、こんた衆の事ぢやアねえ、こつちのことだは。ヤ」こつちの事といふことがあるものぢや、昨宵の宿での事をぬかすのだらう、その襖をぶつこかした籠棒と云つとアおれが事だは。旅人「ハア、こんたそのべらぼうか。ヤ」オ、其べらぼうだ。旅人「ハ、ハ、ハ、籠棒だから籠棒と云つたがい、ぢやアねえか。ヤ」イヤこいつ悪く洒落やアがる。旅人「糞をくらへ。ヤ」なんだ糞をくへ、コリヤおもしろえ、食ふべいから持つて、うしやアがれ（と、彌次郎眞つ黒になつて、力む。されど相手は血氣盛んの勇みでやひ、馬の糞を杖の先につっかけさし出し「サア持つて來たから、食らへく。彌」イヤ馬の糞は嫌ひだ。旅人「きらひといふことがあるものか、是非食はせに

やアおかぬ（と、三人かゝつて彌次郎を手ごめにする。北八をかしく、中へはいり）喜「イヤもう御免なせえ、たれたも同然でござりやす。三人「ハ、ハ、ハ、堪忍してやらう（と、行き過ぎる。彌次郎とても叶はぬと見て、たゞ口のうちに、ぶつくさく）此内桐の木中柴を打過ぎ、山中に至る。爰は麻の網袋早繩などを商ふなれば、北八

みほとけの誓いと見えて寶藏寺なむあみ袋はこゝの名物
かくて藤川にいたる。棒鼻の茶屋軒毎に生肴を吊し、大平皿鉢、店さきに並べたてし、旅人の足をとむ。彌次郎兵衛

ゆで蛸のむらさきいろは軒ごとにぶらりとさがる藤川の宿
それより此宿を打過ぎ、出はなれの怪しげなる茶店に休みて。喜「なんだか、こうてきに蟲がかぶる、婆あさん素湯はあるめえか。茶屋のば「ハア素湯はござらぬ、水を進ませませうか。喜「エ、薬を呑むのだえ、コリヤたまらなくなつた、

時に雪隠せつちんは何處にあるヤ「何處にとつて、そんなにおいへ(屋上)を見廻しても雪隠が疊の上にあるものか、裏うちへいかつし 喜ヒヤアつきあたりに見えるく、(と、うらへ出で、雪隠へゆき、しばらく用たして出で、あたりを見れば、このうらに物置を住居とせし一つ家あり。内に十八九の娘、髪は取り亂しぬれども、なか／＼の上しろもの、只一人居るやうす。北八例の悪洒落わるにて、ずつと此うちへはいりて笑ひかけ)喜モシ御無心ごむしんながら水を一つ(と、手を洗ふ内、娘はげらく笑つてゐる)喜コウ姉さん、おめえ何を笑ひなさる、そして一人此處に居なさるのか、無用心ぶようじんな(と、あたりを見れども、外に人はなし。北八腰をかけて、煙草すひつけ)「へ、氣味の悪い、何を見て笑ひなさる、コレサ何を笑ふのだよう(と、娘の手をとつてひつばるに、さすが振り切りもせず、やつぱり笑つてゐる。北八こいつは有難い、もうしめた者だと、ぐつと引よせる。いつの間にか子供が見つけて)「ワアイく、あの人は氣ちがひと色事をせる

「ア、ハ、ハ、ハ、(と、大聲をあげて、笑ひ駈け出す。北八びつくりして逃げのかんとするに、娘はつかみついて放さず)「喜エ、この男め、放さんく 喜これは情ない(と、むりに引き離さんとする所へ、この娘のおやぢ立ち歸つて)親仁わがと「コリヤ我徒は若い女子をなごを捕へて何せるのぢや喜イヤ何にもしませぬ おやぢ「せんものが、なんぜ(何條)女一人をる内へ這入らつせえた、コリヤじやうち(承知)ならんわい 喜ナニサ、今用達しに行つて、ツイみづをもらつたばかりさ おやぢ「インニヤ、あれは氣ちがひでござる、こなさん氣のちがうた者をとらへて慰みかけさつせえたに違ひはあらまい 喜ナアにとんだことな おやぢ「インニヤ、すまんく、氣違ひと侮つて、ひゆつと此方こなたさんが、やりからかいたにちがや(違)しままい、とかう(兎角)云はつせるな、此分では濟まんぞ(と、わめきちらかし大騒ぎをやらかす。此の内彌次郎兵衛表の茶店に待ち居たりしが、北八手水に行つてかへらぬ故、後あとから見に來たり、先程より此の様

子を片陰に見てゐて、をかしきこらへられず、しかしもう出かけてやらうと、うそ／＼出できたりて、キ「御免なせえ、わつちやア此男の連つれのものだが、委細聞きやした、こいつめあのやうに見えても、ありやうは、ちつと氣きがふれてぬやす、了簡れうけんしてやつてくんなせえ、エ、此野郎めよく世話を焼かせる、アノ面つらわよ、アレ見なせえ、きよろ／＼する顔が證據、娘御むすめは女だけまだしも、イヤモこの氣違きちがえには困り果てやす、おきき「イヤ／＼さうではあらまい、ナニあの人ひとが氣ちがひなものか、キ「ハテサあの煩付わづつきを見なせえし、アリヤ／＼あの通りだ、キ「キ「なんだ、おれを氣違だ、コリヤ面白い、ハ、ア降るは／＼、アレ／＼花の吹雪が、ちりやたらり、うんきんたらり、かんきんちり、ちりかゝるやうておいと／＼してねられぬ、ト、／＼、ヤアそこに居るは女房にようばうどもか、イヤ能い女房ぢやに／＼、コリヤのほいほい、さんなあるかいな、ヤンヤア、キ「アレ御らうじろ、あの通り、其辭ことばあの面つらで色氣違きちがえさ、それだから女と見るとびろ／＼

して、ほんに恥を云はにやア理りが聞えやせぬが、此奴こいつめはわしが弟おとこで、イヤモこんな因果いんぐわなことアござりやせん、おやち「ハアこなさんがさう云はつせると、わしも悲かなしい、見さつせる通り、たんだ一人の娘がこの病で、わしはおつき(大)な苦患くげんでござる、彌や察さつして居り升、エ、この馬鹿野郎め、何をげら／＼笑ふのだ、時に親父おやぢさんおやかましようござりやした、おやち「マア茶でものんでござらつせえ、彌やもうめえりやせう、サア氣違きちがえめ、うせをれ(と)、彌次郎兵衛が、ちやらくらに、やう／＼とまひ治まり、彌次郎兵衛きた入を連れて、こゝをのがれ出かけ、はては大笑ひとなりて)

口説くさきたる娘はほんの氣ちがひにこちやまちがひとなりし目ちがひ

かく打興じてこゝを立ち出で行く道すがら、彌や「コウ北八、手めえもとんだものだ、氣の違つた娘をとらめえてどうしようと思つて、業晒ごんざしな男だ、キ「へ、面おもて目次第もねえ、併しわつちまでを氣違きちがえとは、彌次さんありやおめえ一生の出来

だぜ 酒でも買かわれ、時にそれに付て咄がある、丁度手めえのやうな氣まぐれ者が、きちげえの女をとりへて、じやらつきかゝると、其女のおやぢが見つけて腹を立て、ヤイ此野郎奴は人の内へ斷りなしに牛込うしろみやアがつて、娘をちよろまかさうとか、ソレヤア赤坂あかさかベイだはえと云ふと、手めえも負けぬ氣になり、イヤうぬなんだ、喙くちばしをとんがらかし(尖)て四ツ谷よとんびのやうだとちやかすと、さきのおやぢが、オ、俺おれが四谷よとんびなれやア、うぬは八幡さまの鳩はとだといふ、コリヤをかしい、此北八がなぜ八幡様の鳩だといふと、親仁がハテ貴様は氣違えの豆を食はうとしたぢやアねえかと、ハ、ハ、ハ、ハ、吾わがなんだ市谷いちげの地口ぢぐちは恐れるハ、ハ、ハ、打笑ひつゝ行くほどに、あづき坂を過すぎ、岡おかの江、ゆふぜん寺を打越えて大平川にいたる。

岸かみに生おふ芹せりのあをみに小鴨かもまでみづに浸ひたれる大平の川

それより大平村を過すぎ行くほどに、岡崎おかさきの驛いせきに至る。こゝは東海に名だたる

一勝地にて、殊ことに賑にぎはしく、兩側の茶屋何れも奇麗に見えたり、ちや、「お休みなさりまアし、お飯をあがりまアし、よい諸白もろはくもおざりまアす、お這入りなさりまアし、」
 吾わがナント、腹はらがすこし御座つたぢやアねえか、吾わがいか様こゝでお小休こやすみとやらかさう(と、ある茶屋へ這入る、内の女)「ようお出なさりました
 吾わがあれさん、お飯めしにしよう、なんぞ甘うめえものは無しかの、吾わがハイよい鮎あゆの肴あゆがおます、吾わがナニ、鮎あゆの鮎あゆだ、吾わがオホ、ハ、ハ、ハ、(と、笑ひながら、やがて鮎あゆの煮あゆびたしをつけて膳を持ち來る)吾わがドレ、こいつはうめえ、そしてがうてきに白い飯めしだ、吾わがエ、外聞けえぶんの悪わるりいことをいふ、アレ女おんなが笑わらつていかア、あいつめは顔かほ中ちゆうが醜みにくくは、吾わが認まならい、が、煩わづらべたが窪くぼんで、踏ふ返かへしの馬蹄石ばていせきといふもんだハ、ハ、ハ、(と、例の悪口たら、酒落てゐると、此内奥座敷には近在の客三人ばかり、此の宿しゆくに流連りうれんし、歸りがけと見え、相方の女郎ぢゆうぢゆう、この所まで送り來りしと見えて、別れの酒盛大騒さわぎにて、此宿しゆくのこゝき節ふし唄うたふ聲こゑ賑にぎかに聞

ゆる うた「菊に 籬結ひ込められて、今は忍ぶに忍ばれず、チツテレ、トツテレ(と、大騒ぎをやる故、北八彌次郎奥の方を覗きみれば一人の客の聲として)」「コレノ、太兵衛はどうせるのぢや たイヤ、仁兵のねき(剛)はあらアズ
 仁「ドレ、おれひら(拾)はうた改めていこしやれ 仁「オト、、、こないに受けては、とかうはあらまい、ソレ差そかい た「オツト、受けた、ひゆつとやりからかいて、これから門もつこうへ戻らうまいか、但しは柵屋か丁子屋へ行かうまいか 女郎の「なんぢやいし、アノ太兵衛さんはナア、酔ひなされるとナア、あのやうなこと云うてぢやがナア、外へやりますことはナア、ならまいわいなア た「イヤ、かゝる折から 櫛屋で手形請取つた代物があるから、行かざならまい 女郎「ムウ、さうかいし 仁「さうともく(チツテレ、トツテレ)かねて手管とわしや知りながら、だまされて咲く室の梅、ハ、、、(と、此内空尻の馬二三疋追つたて来り、此茶屋の軒に繋ぎて、馬士共中庭より奥へ通り「旦那

方、お迎ひに参りました 三人「御太儀、お名残惜しいがこれで別れざならまい 女郎「久しかぶりて是からまた鳴海のお鶴さんぢやおませんかいな た「ハ、、、サアいかうまいか ちや屋の女「御機嫌能う(と、それづくに挨拶するうち、三人の客は銘々空尻馬に打ち乗り、暇乞して乗り出す。女郎送り出してしまんくの洒落もあれども略す。彌次郎北八始終此態を見て、女郎買のからしり馬で歸るもをかしいと打笑ひながら)

三味線の駒にうち乗り歸るなり岡崎女郎しゆ買に來ぬれば
 かくて二人も此所を立出て、宿はづれの松葉川を打越え、矢矧の橋にいたる
 櫛干は弓のごとくに反橋やこれも矢はぎの川にわたせば
 それよりうたふ坂町尾崎の郷、今村の建場につく ちや屋のば「名物、砂糖餅お召しなさらまアし、お休みなさらまアしく 吾「オイこの餅はいくらづんだ
 ちや屋の女「三文でおざります 吾「いづはやすい、こちらの 鵜焼はいくらだの

亭主「それも三文 喜「イヤこれは三文では高いやうだ、ナント御亭主、かうしな
 せえ、これを二文にまけてくんなせえ、その代り、そちらの丸い餅は四文に買
 ひやせう（亭主「いつは變ちきなことを云ふと思へど、どちらにしても損のい
 かぬことゆゑ）」喜「ハイようおざります、お取りなさりませ（喜多八煙草入から
 錢二文取出して）」四文あらば丸いのを買はうと思つたが、二文あるからこの鴉
 焼にしやせう（と、うづらやきをひとつて打くらひながら行く）喜「ハ、ハ、こい
 つは喜多八でかした、流石の亭主も膽ばかり潰ぶしてゐやアがつた 喜「ナント
 智恵はすさまじからう 喜「へ、笹棒め、おれもその位なことをしかねるものか、
 ハ、ハ、ハ、」

わづかでも欲には耽るうづらやき三文ばかりの智恵をふるひて

かく興きようじ笑わらひつれて西田街道にしだかいだうより半里計り北の方に、名にし負ふ八ツ橋の舊
 跡を思ひて

八ツはしの古跡こせきをよむもわれくが及ばぬ恥をかきつばたなれ

程なく池鯉鮒ちりふの驛えきに至る ほどうた「みやで泊るか、お龜かめ（にしようかナアたど

しや岡崎おかざきよい女郎衆ぢやうしゆ、ナアドウく 喜「いめえましい、草鞋で足を痛めた、ち

つとの間草履で行かう、モシく此菓草履はいくらだね 喜「アイく十六文で

おます 喜「こいつは安い（この亭主伊勢者にて商は巧者なり 喜「アイお安

おますわいな、わたしとこの草履は、ひゆつと丈夫じやうぶで、ねから切りや致しませ

ぬ 喜「ねからア切れめえが、先の方から切れるだらう 喜「イヤお穿はきなされて

はたまらまいが、しまつて置きなると、何時迄もおますわいな 喜「さうだら

う、そしておめえのとこの草履は鼻緒があつて重寶だ 喜「鼻緒のねえ草履が何

處にあるものだ 喜「何なんにしる、やすいものだ（と吊してある草履を引ツきり、

とつて見て）」イヤこの草履は、ちんばだわえ、片々かたかたは大きくて、こつちらは小い

やうだ、コレヤア八文ヅ、にしちやア、大きな方は安いが、小な方は高いもの

だ、ナント御亭主片ッぽの大きな方を九文に買ひやせうから、こちらを七文に買けてくんなせえ 亭「アイようおます、お召しなされ 彌「なむさん銭が足りない、一足買はうと思つたが、たつた七文ほつきやア(計)ねえから、アノこつちらのかた／＼の方ばかり買ひやせう 亭「ハ、ハ、ハ、こいつは大笑ひだ、おいらが眞似をしようと思つても、餅ならいゝが、草履片々が何になる物だ 亭「お左様でおます、一足おしなさりませ、どうも片々離してはあげられませんわいな 彌「ナニ、かたつぽ(片方)は買られねえか、流石は田舎だけ、物が不自由だ 亭「エ、江戸だつて、ナニ草履を片々賣るものがあるもんだ 亭「なんなら之になさりませ、これぢやと一足で七文にしてあげませうわいな 彌「エ、馬のくつが、はかれるものか、人じらしな 亭「一足買ひな、おめえ片つぽ買つてどうする積りだ 彌「また先へ行つて片つぽ買はう 亭「ハ、ハ、ハ、十四文にいたしませう、一足お召しなされ 彌「貴様とつくにさう云へばいゝ(と、やう／＼の事にて、

草履を調へ、草鞋をぬぎ捨て、はきかへ(ゆく)かくて此宿を打過ぎ、早くも八町噺、さなけ明神を伏拜み、今岡村の建場に致る、此の所はいもかはといふ麵類の名物、至つて風味よしと聞きて

名物のしるしなりけり往來の客をもつなぐいも川の蕎麥

それよりあなふ村、落合村を過ぎ行きて、有松に至り見れば、名にし負ふ絞の名物、色々の染地、家毎に吊し飾りたて、商なふ。兩側の見世より旅人を見かけて「お這入り／＼、貴方お這入り、名物有松絞お召なされ、サア／＼これへ／＼お這入り／＼ 彌「エ、やかましい奴等だ。

欲しいものありまつ染よ人の身の油しぼりし金にかへても

亭「ナント、彌次さん浴衣でも買はねえか 彌「おもいれ見倒してやらうぢやアねえか 亭「よからう、たんと買ふ面をして慰さんでやらう(と、あちこちを見廻すうち、此町のとつぱづれに小見世なれども染地色々表に吊しある内へ這入

りて) 彌コレ此絞はいくらします(といふに、此内の亭主と見えて將基をさしてぬたるが、餘念なく有頂天と成て) 亭サアしまつた、時にお手はなんぢやいな 彌コレサ、これやアいくらだといふに(と、すこし聲高こゝろにいふと、亭主膽をつぶして) 亭ハイくそれかな 彌いくらく 亭コウト、あなたいくらだとおつしやる、そこで斯様にいたそかい 彌エ、小じれつてえ、コレ、賣らねえのか、直段はいくらだといふに 亭ハテさて、やかましい人ぢや、そちらの方へ引返へして符牒ふてふを見せなされ、只知れるものぢやないわいの 彌こいつはとんだ商人だ、符牒にウの字とエの字が書いてある 亭オ、さうぢやあるコウト三分五厘切れぢや 彌高いく、まけなせえ 亭ナニ、まけい、イヤならまい、此下手將基へんしやうきに しゃうぎのあひて「次兵さん、マア商ひをしよまいか、貴方がたが待つて御座らつせる 亭よいわいのう、とても敵等てきらはよう買やしよまい、ハテ買ひたうても金銀はあらまい、無い筈ぢや、わしが手におはしますぢやて

彌何だ篋棒め、金銀があるまい、人を見くびつたことをいやアがる、あるから買はう、是は犢鼻褌だけいくらだえ 亭なんぢや、犢鼻褌買はう、イヤ不躰千萬な 彌こいつ、おいらをてう(嘲)しやアがる、賣物買物うりものに無躰ぶつめも何もいゝるものか、はなつたらしめが(と、大きな聲する。亭主はつと心づきさうく將基をやめて)「ハイく、是は産相そまう申しました、何なとまけてあげませずに、お召し下されませ 亭さういひなされヤア、しこたま買つて上げやすは、彌次さんおめえお袋や内儀かみさまへの土産にはあれがよからう、いくらだの 亭へい十四匁八分でおます 彌ソレそつちらのは 亭これは十五匁 彌もつといゝのはねえか 亭有りますとも、へいこれがなア廿一匁ヅ、こちらが廿二匁、下のがな十九匁ヅ、でござります 彌もつとこれよりいゝのがほしい 亭イヤもう皆斯様な物でござります 彌ム、そんならでえじ(大事)に仕舞つて置きな、誰たれぞが買ひやしよう、わつちやアいつち初手しよてに見ておいた此三分ぎれを手拭

だけ切つてくんなせえ 尊「へいさやうかな」と、きもをつぶし、二尺五寸切つて出す。彌次郎此の代を拂ひてこゝを立出で、「とんだ奴等だ、既にいゝ三太郎にしようとしやアがつた、贍つぶしな、ハ、ハ、ハ、時にてえぶ道くさをしたちと急いでやりかけよう」と、これより少し道を早め行く程に、早くも鳴海の宿に着きければ)

旅人のいそげば汗に鳴海がたこしもじぼりの名物なれば

かくよみ興じて山げた橋をうち渡り、笠寺觀音堂にいたる。笠を頂き給ふ木像なる故この名ありとかや。

執着の涙の雨に濡れじとやかさをめしたる観音の像

それより、とべ村、山ざき橋、仙人塚をうち過ぎ、やうやく宮の宿にいたりし頃は、はや日くれ前にて、棒鼻より家毎に客をとどむる出女の聲轟し 女「あなた方アお泊りぢやおませんか、お湯もちんと沸いておます、お合客はお

ません、お泊りなされませ〜 彌「泊は何處にしよう、錢屋か瓢箪屋か 尊向ふのうちばなんだ、鍵屋か 尊モシお泊りかな 尊オイ泊りやせう、旅籠はいくらだ 尊オホ、ハ、ハ、ようおます、お泊りなさんせ 尊なんだい〜とか、只で泊めるか 彌むしのい〜(と、笠をとつて這入る宿の亭主)「お湯をあげうず、お足がよごれてなけらにや、直ぐにお風呂へ御召しなされませ(と、荷物を座敷へ運ぶ、此内彌次郎北八も草鞋をぬぎ、おくへ通る。女、茶を持ち來り)「お茶あがりませ 尊どうのあんま」お療治をなされませぬか 尊療治もしてえが、マア腹がへつた 彌「餓餓でも食つて來や、此處の名物だ あんま」さやうなら後に來ませ 尊(と、立つて行く。あとより二三人連れにて、弓張提灯をともし)「ハイお泊りでおざりますか、是は當驛のおんばこさま、手水鉢の建立、お志をお頼み申します 彌ハイ北八そけへあげてくりや 尊是は少しながら(と、せに八文出してやると、帳にしるし出て行く。入かはりて坊様が一人)「ハイ私は六十六部

の石碑を建てます、お心持次第お施主につかつせえて下されませ 彌「なんだ石塔の施主につけ、いめえましいことを云つて来る、ソレ持つていきなせえ」と、同じく八文ほうりだしてやる。入かはりて此うちの亭主ひよつくりかほを出せば 彌「エ、又八文か、貴様は何の建立だ 喜「イヤ明日はお船でおざりますか、又佐屋廻りをなされますか 喜「すぐに爰から舟にしやせう 彌「舟はいゝが、おいらアどうも船ではなぜか小便をするがこはくて、そしてねつから出れえには困る、七里乗るといふもんだから、こらへては居られず、どうしたものだらう、佐屋へ廻らうか、ノウ北八 喜「イヤそれには能い物を上げうず、左様のお方には私がいつも竹の筒を切つて上げますから、それでお小用なされるがようおざります 彌「そんならそれをお頼み申しやす 喜「ハイ、先御膳を上げう」と、立つて行く。此女内膳を持つて来る。こゝにても色々あれども略す。やがて膳もすみたるころ、先ほどのあんま來り「且那方、致しましよかいな 彌「サアや

らかしてくんなせえ(と、これより彌次郎按摩に採ませる。この内隣座敷に泊り合せし警女二人が慰みに三味線を出して、伊勢音頭をうたふ聲する) うら花もうつろふあだ人の、浮氣も戀といはしろの、結びふくさの解きほどき(ハリサ、コリヤサ)よい／＼よい／＼いとなア(ツテ、チレ／＼)喜「イヤこいつ、いい聲だ、ナント按摩さん、わしは踊りが上手だ、おめえ目が見えると、あの唄で一つ踊つて見せてえもんだがなア あんま「わしも好きだがなア、踊らつせる音を聞かアず、一つやらつしやらまいか 喜「やるはやらうが、賞めて貰はにやア張合がねえから、かうしやせう、わしが踊りしまつた所で、おめえのつむりを一寸撫でようから、それをきつかけに、やんやアと賞めてくんな、よし／＼、ソレ踊るぞ 隣「解けぬ思は二つ箱、三つ四ついつもとまり舟、それが苦界のゆきちがひ、ハリサ、コリヤサ(と、三味線に合わせて北入手を叩き踊る眞似をして)喜「よい／＼／＼よいやさア(と、踊りしまひ、座頭の頭をちよいと足に

りし様子してやつたりと、そろ／＼這ひかけ、襖をそつとあけて隣り座敷へ這入りみれば、替女二人は前後も知らずれいりばな。彌次郎替女の懐へ這入らんとせしに、流石は目の見えぬものとして、用心きびしく風呂敷包を両手にしつかり抱へてゐる故、これが邪覓になりて遣入にくく、彌次郎そろ／＼此風呂敷包をとりのけようとすると、ござ目をさまし、片手につゝみをかへ、片手に彌次郎が手をぐつと捉へて）「ござぬす人よく、お宿の衆く／＼と、わめきちらされ、彌次郎はあてが違ひ、襦袢一ツの此なりを見つけられては業晒しと替女が手をたゝきはなして、そろ／＼に此方の座敷へ歸り、夜着をかぶり、そ知らぬふりして寝てゐる。北八は疾くより目を覺し、くつ／＼と笑つてゐると、此うち勝手より亭主駈けつけ）「ござさまどうさつせえました。ござわしが此かかへてゐる包みをいんま（今）だれやら取らうとしをりました、雨戸でも開いてあるか見てくれなされ。ぎや何處も開いてはぬをりませぬ。ござそれでも、い

摩さん、もういゝによ（と、云ひすて、風呂場へ行く。按摩は暇乞ひして歸ると、うちの女床をとりに来り、蒲團を敷きて勝手へ行く。彌次郎ははやその儘寝かける。此内きた八も風呂場より歸りて）「ぎや彌次さん、もう寝かけたの、ときにおめえ隣座敷のしろものを見たか、とんだ美しい替女だ。替女なら目があるめえ。ぎ目はねえが、まんざらぢやアねえ、今湯からあがつてくるとき、一人の替女めが手水場にまごついてゐたから、小當りに當つておいた、なか／＼やぼでねえ代物よ。ぎドレ／＼（と、這ひ起きて乗り出し、襖の間からさし覗き）「ハ、ア、うしろ姿はなか／＼意氣な風俗だ、ヨリヤこの儘では置れぬばえ。ぎや、さうはならぬ（と、いひつゝ夜着を引被り、心の内には己れ今にはひかけてやらうと、態とれるふりにて横になると、直にそらいびきをか。此内隣座敷もひそまり二人の替女もれた様子、夜もしん／＼と更けわたる、後夜の鐘「ゴウん／＼、（彌次郎そつと起き上り見れば、北八は本當にいい

んまの盗人は何處から來をりましたらうな 亨ハ、ア襖が開いてある、モシ／＼お隣のお客様方およつてござらつせるか 彌ア、ウ、ムニヤ／＼ 亨ハ、ア／＼に落ちてあるはなんぢや、イヤ犢鼻褌ぢやさうな、モシお客様方、これは貴方がたのではおざりませんか（と、大きな聲するに、彌次郎ハツと思ひ、そつと頭をあげて見れば、わが犢鼻褌が替女の枕もとから敷居越しに我が枕もとまで長くなつて落ちてゐる故、をかさもをかしく、流石おれがのだとも云はず、もじ／＼してゐると、北八わざといぢわるく起きあがり） 亨「なんだえ、そう／＼しい、犢鼻褌が落ちてゐるとは、ドレ／＼、それか、コレヤア彌次さん、おめえの犢鼻褌ぢやアねえか 彌エ、情ないことをぬかしやアがる（と、北八が夜着の袖を引く。亭主もさてはと承知して心の内にをかしく思ひながら） 亨「イヤもう旅の事でおざりますから、お互にお氣をつけて御用心なさるがよい、替女様もうおやすみなされ こそ」氣味が悪くて寝つかれませぬ、能うしめて

行つて下さりませ 亨「左様なら（と、そこらたて廻して出て行く。彌次郎そつと手を延して犢鼻褌を手繰り寄せる。きた入をかしく吹き出しながら） 替女どのに思ひこみしは是も又戀に目のなき人にこそあれ すでに夜もいたく更けわたれば、皆々漸く一すぬの夢を結ぶ。曉の風樹木を鳴し浪の音枕に響きて、撞き出す鐘に驚き、目さめて見れば、はや明方の鳥 「カア／＼ 馬のいなよき」ヒイン／＼ なが持人足らた「さかばナア照る／＼ ナアエ、鈴鹿は曇るナアレアエ、どつ／＼い／＼ だふねをよぶと船が出るヤアイ／＼（此時宿屋の女起に來り）「モシいんま一番船でおます、御膳を上げましょ ぞ」オアイ／＼ 北八サア起きや（と、二人は起き出て手水つかふ内、膳も出て食ひしまひ、かれこれする内宿の亭主）「お支度はようおざりますか、舟場へ御案内致しましょ」それは御苦勞、サア彌次さん出かけやせう（と、そこ／＼に支度して表の方へ出かける。宿の女房、女）「御機嫌よう、又お下りに ぞ」アイお世話になりやし

た(と、暇乞して舟場へ行く。亭主此處迄送り來り)「船頭衆お二人様ぢや頼みますぞ、や」ときに忘れた、お亭主さん昨宵アお約束のかの小便の竹の筒は「ホンニちんと切らして置きましたに、ドリヤ取て参りましたよかい(と、亭主彼の竹の筒をとり歸る。此渡し船七里の海上、一人前四十五文ヅ、其外駄荷乗物皆それ〴〵に貸錢を拂ひ、船にのる。此時亭主竹の筒を取つて來り)「サア〴〵お客様そこへ投げますぞ、き「なんだ火吹竹か、や「これをあてがつてナ、とやらかすのだ、よし〴〵、イヤ御亭主さん大きに御世話、サア是で大丈夫だハ、ハ、ハ、

おのづから祈らずとても神います宮のわたしは浪風もなし

かく祝しければ、乗合皆々勇みたち、やがて舟を乗出して、順風じゆんふうに帆をあげ、海上を走ること矢の如く、されど浪平かなれば、船中思ひ〴〵の雑談ざうだんに、頭あたまのかけがれもはづるゝばかり、高聲かうしやうに笑ひのゝしり行くほどに、あきなひ

船幾艘となく漕ぎちがひて「酒飲まつせんかいな、名物蒲焼の焼きたて、團子よ
いかな、奈良漬で飯食はつせんかいなく、ヤア、よく寝たは、いつの間まにや
ら、ごうぎに來たぞ、時に小便せうべんがもるやうだ(と、宿屋の亭主がくれたる竹の
筒を出して、こゝでこそと前にあてがひ小便をする。此竹の筒は火吹竹の如く、
先の方に穴を開けたるなれば、船の縁にもたせかけて小便をするつもり所、
彌次郎の心には、穴のあいてあるには心づかず、澗瓶しゆびんのやうに思ひ、竹の筒へ
小便をしこみて、あとでうちあける事と心得、船の中にてすぐに竹の筒へしこ
みければ、先の穴より小便が流れ出て、船中小便だらけとなり、乗合皆々きも
をつぶし)「コリヤ〴〵何ぢやいな、水みづがえらう流れるのり合あだれか土瓶をうち
こかいたさうな、ソレ〴〵烟草入も紙入もびつしよりぢや、コリヤたまらんは、
ヤアおまえ小便せうべんぢやな(と、咎められて彌次郎竹の筒を隠し所にうるたへて、
まご〴〵する、尋エ、彌次さん、どうしたものだ、おめえ小便をするなら、そ

岸に至る)のりあひ「来たぞく、小便にこそ濡れたれ、船は恙なく桑名へ来た、めでたいく(と、みなくこれよりあがりて此宿によるこびの酒酌みかはしぬ)。

けへあがつて竹の筒の先の方を海へ出して、しこむのだけはな、滅相な、船の中が小便だらけになつた、エ、きたれえく、おれは又こゝでしこんで、後でぶちまけるのかと思つたのりあひ「イヤはや途方もない、コレヤア臭くてならんわい船頭衆く、もう敷物は外にはないか、せんどう「誰ぢやぞい、小便をしたのは、船玉様が汚れる、早うコレ拭つせいなきエ、氣の利かれえ人だ、せんどう「エ、ソレまだ竹の筒から落ちる、それもほかして(捨て)しまはつせえなき「イヤこれほそつちへやらう、火吹竹にならうから、吾エ、おめえが小便した物をナニ火吹竹になるものだ、早く拭きなせえ、埒のあかぬ(と、いぢめられて彌次郎憤鼻禪をはづし、そこらを拭く内、北八は薄べりをひつくりかへして敷き直し)き「サアくこれでい、どなたもお据りなせえ、き「コリヤ皆様御免なせえ、とんだ番狂はせを致しやした(と、つひに無いしよげかへりて、そこら取り片付ける。乗合皆々苦笑ひして、だんまりでぬる。此内早くも船は桑名の

道中膝栗毛四編卷之下終

東海膝栗毛五編序

歌人は居ながら名所を知り、雅人は行きて名所を探ぐる、今年五篇目の膝栗毛を十返舎の主人、心の手綱をかいくりかいくり、くりかけ見れば伊勢の海、千尋の濱に深くうがちて、洒落を花なる貝盡し、古跡を温れて新しき、趣向を見する筆のすさみに、予も寢ながら名所をしり馬、はれる顔にて序すること、是作者の需に應じてとほうその皮、もとめもせぬに筆を探りしは、跡の一杯がすぎ田の梅の、香にひかれたるうかれ心、これも亦餘慶の仕事と謂はんか。

文化丙寅春

龜山人蘭衣誌

附言併凡例

予今年ことしかん神無月なづき廿日あまり、六日の朝思ひたちて、東海道に杖をばせ、伊勢路に赴き、内外うちとの宮巡みやめぐりをして歸りしは、雪見月ゆきみづきの五日になん、そよりして此の五編目の著述にかゝり、彫工机てうこうのもとに絶えず、須臾しほりくも筆をおく間なし。然るにいづれの人の編りつづけん、膝栗毛續編といへるもの皇都みやとの書肆しよしより下したりとて、上總屋忠助なる人のもとより、予が方におこせたり。予是を閱けみするに、其排設はいせつつゞまやかにして、滑稽たぐもとも工みなり。惜しむらくはかゝる筆の文あやをもて、などで自立じりつせざるこそ不審いぶかしけれ。そは名を索もとむる人に非ず、欲に馳はするの徒なるべき歟。されど予が爲の引札にして思はざるの幸甚からじんなりき。此故に今五編目に至るまで、頓て見んことを競ひ給へる人のあなりと、書肆の喜びは、益々膝栗毛の尾に尾をひかんことを、おしはかれるにや覺東なし。

或人曰、此書初編より四編に及ぶ迄、彌次郎兵衛北八なるもの、髮結かみゆひさか月

代をせし所を見ず。こは大江都を立ち出でしより以來、其事無きは如何にぞや
 予答曰、こたび旅行の刻、しば／＼その光景を見るに、風土人情の差別、方言
 の可笑しみ、其洩れたること、缺けたること算ふるに十指を出でたり。されば
 その足らざるを穿ち難し給はるこそ、予が爲の幸なれば、取りあへず其事をも
 て追加に出せり。

驛中飯盛おじやれの戯れは、卷中毎に粗あらはして事ふりたれど、こたび作
 者の旅寢にて、實に夜這といへることを仕損じたることあなれば、其事をも
 て彌次郎兵衛北八が四日市泊りの趣向とす。

東海道追分までを上巻とし、其餘伊勢路にかゝりて、事繁く記すに違あらず。
 漸く山田に此巻の筆をといめて、續編に妙見町の奇宿、古市の遊樂、相の山の
 宮めぐり等をあらはし續いて出版す。

兼々聞及貴公才
 一遍相逢親十回
 探得神都神代穴
 翻々乗膝栗毛來
 右

初途十返舎一九生自勢州還
 戲賦以送

瀬 芳 園 草

東海 膝栗毛五編卷之上

宮みや重しげ大根だいこんのふとしくたてし宮柱みやばしらは、風呂吹ふうぶきの熱田あつたの神かみの慈眼みそめはす、七里の
 わたし浪ゆたかにして、來往らいわうの渡船難とせんなんなく、桑名さなに着きたる悦よろこびのあまり、名
 物の焼蛤やかせがはに酒酌さけしやくみ交かはして、かの彌次やじ郎兵衛らべゑ北八きたはちなるもの、やがて爰こゝを立ち出で
 辿たどり行く程ほどに、此この頃ころ旅人りよじんの唄うたふを聞きけば、はやりたしぐれ時雨蛤みやげ土産みやげにさんせ、宮
 のお龜かめが情所なさけごと、ヤレコリヤ、よウしくよし、まごコレだんなしゆ旦那衆もど、戻もどり馬乗うまのりら
 んせんか、まごよウしよし、まごやすいに只ただ百五十ひゃくごじゅうごでやらまいか、まごよウしよし
 きせうろく四文しぶんで乗のりるべいか、まごそんなちよウせよせ、馬うまヒインひいん、長持人ながもち
 足船あしふねはナア、追手おひてに帆ふかけて走はしるナアンエ、早くサア、熱田あつたに泊とどりたヤナン
 アエ、八兵衛やべゑどうした、馬うまでもおまのんだか、なんだかはねらア、どつこい、
 き「なんと彌次やじさん、何も慰なぐさみだに、斯かうしようぢやアないか、おめえの荷物にもの

とわしがのを、一緒にして、一人がひつかついで、半日代りに旦那と家來の仕打うちはどうだらう。キ「コリヤ面白おもしろえ、それよからう、先づおいらから旦那を始めるぞ。キ「それやアい、が、今日はもう八ツだから、七ツ代りにしやせう、勿論旦那と供とものあしらひは、互たがひに番狂ばんぐるはせ無しにやらかしやせうぜ。キ「知れた事よ（と、云ひつゝ、あたりに竹一本を才覺し、彌次郎が荷物と北八が包を兩方に括くくりつけて）キ「先づ年役としやくにおめえ旦那よ、おいらは上下といふもので出かけよう、ナント餘程よつほど氣がきいてゐるだらう（と、後から荷をひつかたげて）キ「モシ旦那キ「なんだ。キ「いゝ天氣でござります。キ「オ、サ、風がないで、暖あつたかだ。キ「さやうでござります（と、假かりに主従の如く打語りつゝ行く程に、早くも大ふく村、安中村をうち過ぎて、町や川にさしかゝれば、彌次郎兵衛とりあへず）旅人を茶屋のれんの暖簾のれんに招かせてのぼりくだりをまちや川かな。かく打興じて、なを村おふけ村に辿り着く。此あたりも蛤の名物、旅人を見

かけて火鉢ひどての灰を煽あふぎたて〜。女「お這入りなさりませ、諸白もろはくもお飯めしもござりませ、お支度しどなさりませ〜。かこ「き「驚おどいかまいかいな、これから二里半はなぢやうばの長丁場ながぢやうばぢや、安やすうして召めさぬかい。キ「イヤかこは入らぬ。かこ「あとの親方おんぢやう、旦那だんなを乗せ申してくだんせ、戻もどりぢや、やすめに。キ「旦那はお徒歩ひろひがお好きだ。かこ「さう云はずと、モシ旦那、やすうしてやらまいかいな。キ「安やすくてはいやだ、高くやるなら乗りやせう。かこ「そしたら、高たかうして三百頂ひたかきましよかいな。キ「いやだ〜、もちつと高たかくやらねえか。かこ「ハアまんだ安いならやみげん（三百五十）で。キ「壹いちメ五百ばかりなら乗つてやらうか。かこ「エ、減相へつさうな、わし共しやうばいめも商賣しやうばいめ冥利めいり、そない（其様）にやつとは頂たかかれませぬ、せめて五百で召して下くだんせんかい。キ「それでも安いからいやだ。かこ「ナアニ安いこんではあらまい。そしたら別べつれに七百くだんせ。キ「イヤ〜面倒めんどうだ、何かなし一貫五百よりまからぬ〜。かこ「はて扱さく困こつたもんぢや、夫おつとよりちつ共ともまからまいか。キ「まからぬ

ゑる) き「コウ彌次さん見なせえ、色男は違つたもんだらう、コレくこの娘
がおめえの飯はちつと盛て、おいらがのは此通り山盛り、餓鬼道の一里塚とい
ふもんだ、ア、うめえく、ヤへ、篋棒め、アノ娘が杓子あたりのいのを惚
れたのだと嬉しがるもなかしい、ソレヤア手めえを安くするのは、きなぜな
ぜ、ヤ「總て此街道では上下の者や供の者へは、飯を山盛りにして出すといふと
だ、それだから誰が目にもおれは旦那、手めえは御供と見えるから、き「ハアさ
うか、いめえましい、キ「ハ、ハ、ハ、蛤をもつとくんせえ、キ「ハイく(又焼き
たての蛤大皿に盛つて出す) キ「おまへのなら猶甘からう(と、女の尻をちよ
いとあたる) 女「ホ、ハ、ハ、旦那様はようほたへ(戯れ)てぢや、き「おれもほたへ
よう(と、同じく尻をつめりにかゝれば) 女「コレよさんせ、好かぬ人さんぢや
き「どうでも、おいらをば安くしやアがる(と、ぶつく小言をいふうち、あ
たりの寺の鐘がゴーン) き「女中あればなん時だえ、女「もう七ツでござります、

き「メたく、約束の通り、是からおれが旦那様だ、コリヤく彌次郎兵衛、
おれはもう馬にも駕にも乗り飽きた、是からそろくひろひませう、い草履
を買つて来やれ、穿きつけぬ草鞋で、コレ見や、豆ぢうが足だらけだ、ヤ「馬鹿
を云ふ、成る程手めえは足だらけだ、一つの足がいくつにも割れてゐるから
き「イヤ旦那に向つて、手めえとは何のとだ、この荷物もそつちへやらう、キ「ハ
テ現金な男だ、マアそつちに置きやれ、き「イヤさうはならぬ(と、つきつける
を、彌次郎兵衛つき戻す機勢に蛤を盛て有皿をひつくりかへす拍子に、焼蛤が
彌次郎兵衛の懐へひよいとはいると、キ「アツ、ハ、ハ、蛤の汁がこぼれて、アツ
ハ、ハ、き「ドレく(と、懐へ手を入れて蛤をつかまへ)「アツ、ハ、ハ、(と、取
り落せば、蛤臍の下へ落ちる。北八うろたへて彌次郎が股引の上からきん玉と蛤
をいつしよに搦)「ヤア、アツ、ハ、ハ、コリヤどうする、きん玉が落ちたらア
(と、ふ中、やうく股引の前の合せ目広げると、蛤はほつたりと落ちる)

「ハ、ハ、ハ、先づは御安産でお日出度い。酒落所ぢやアねえ、とんだ目にあつた。女お怪我はござりせぬか。怪我はせぬが、まだ腹の中がひりくする。ハ、ハ、ハ、」

「骨薬はまだ入れねども蛤の火傷につけてよむたはれうた。」

それより此所を立出で、はつ村八幡を打過ぎ、七ツ家あくら川に至りし頃、四日市の宿引出迎ひて、「是はお早うござります、私お宿をお頼み申上ます。帯屋つちらア帯屋へ行やす。やど引イヤ今夕はお大名様おふたかしらお泊りで、帯屋は兩家ともおさし合でござりますから、私方にお泊り下さりませ。」と、いふは嘘なり。御小身様のお泊りで、下宿は僅なれども、夫をいひ立てに、やど引わが方へ泊めんとする計略なり。二人ともぼんくら成れば誠と思。やど引なら貴様の所はいくらで泊めるやど引「ハイそれはいかやうとも。やど引は宮の斧屋に泊つたが、とんだ町噂にした、百五十で燭臺をつけて飯を食はせるか、そして酒

も菓子も出したから、コレヤア黙つても居られめえと、別に茶代を貳百やる積りの所、やつぱり遣らなだから、大きに安かつた、貴様の所もその積りで馳走するがい。やど引「畏りました。」と、だんく咄しながら打連れて行くともなしに四日市の棒端に至れば、宿引かけだして、「サア是でござります、コレおとまり様ぢや。やど引「お早うお着きなさいました。」と、挨拶の内、二人は草鞋を解きながら、見廻せば、至つてむさくるしき宿にて、入口に煤けかへつて、横にいがみたる膳棚と、こはれかゝりし籠のある内なり。やど引「今晩は、私方も込みやひました、お氣の毒ながら、奥のお客と御一所になされて下さりませ。」と、随分よしき。女房「左様ならこれへ。」と、案内して奥の間へつれ行く。合宿田舎者二人あり。やど引「御免なさい。田舎者の「お早うござらつせえた。きア、草臥れた、えいとこな。女房「すぐにお風呂に召しませ、御案内致しませう。草ドリヤお先へ参らう。」と、手拭をさげて湯に行く。此内十四五の前髪、風呂敷包の箱を下げて

「お煙草は入りませぬか、楊枝、齒磨、お鼻紙はよろしくござりますか 田舎久しかぶりて、吉田の大竹へのたり込んで、おやまに浅柄の煙草貰ひをつたが、皆吸うてしもうた 今一人の田舎もの「四文粉はあらまいか しゃう人「イヤそれはござりませぬ、是をあがつて御らうじませ 田舎「ドレドレ、バツタ〜、こりやねからたわいが無い、こつちらのはどうぢやい、(と、煙管についてすつば〜) しゃう人「それがようござりませう 田舎「イヤ、これもねから火がつかぬ、見やんせ、吸うてなるうち消らかいた しゃう人「ソレあなたの膝に燃えてをりまするなか「ヤアコリヤ、〜大事のきりもん(着物)を燃らかいた、フツ〜、イヤこないに膝の焦る煙草は入らない、持つていかんせ しゃう人「ハイ左様なら(と、小言いひながら出て行く。きた入湯よりあがりて)「サア彌次さん、湯にはいらねえか「あなたお召しなされませ しゃう人「イヤ大分仇な奴等がちらつくぜ、北八こいゑに「今のやつを風呂場でちよいと契つておきは早からう しゃう人「ソリヤ本統にか、どうして〜

「おれが湯に入つてゐる所へ、おぬるくはござりませぬかと云つて、うせをつたから、直にそこで約束した、まだ一人いゝ年増が見えるから、おめえ湯に入つて待つてゐなせえ、大方其處へ来るには違はねえから、そこで口をかけるが、いゝ「承知々々、ドレ入つて來やせう(と、彌次郎は湯にいる。また一人商人)「ハイ焼酎は入りませぬか、白酒あがりませぬか しゃう人「オットその焼酎を少しくんな、オト、〜、よし〜(と、茶碗につがせて錢を拂らひ、かの焼酎を脚に吹きかけ)「よし〜これで草臥がやすまるだらう、どなたも御免なさいヤアえいとこな(と、横に寝かける。此内彌次郎は湯に入て女の來るのを待てども待てども一向に來らず、手足の指一本〜に洗ひて、しばらくの内待らぼうけと成、あまり長湯をして、湯氣にあがり、風呂場の羽目に凭れてぐにやりとなりぬる。北八は餘りに彌次郎が長湯なる故、そつと風呂場へ覗きに來たり、このていを見て)「キヤア〜〜彌次さん、どうした〜、コリヤ大變だ

る手そぶりにやア、有らまい事でもないが、こつちであたまをよけようとする
と、又足で探りまはいては、飄り物にさツせる、なんぜ人のあたまア土足どたくにつ
ツかけさツせえた、すまない〜 ヲソリヤお氣の毒な事だ、御免なせえ、此
様にお合宿するも他生たじやうの縁とやら、どうぞ了簡してやつて下さりませるか、こ
んたがさう云はつせりやア聽かまいものでもないが、あんまり人を馬鹿にさつ
せるから、ヨイヤもう生酔なまおひだから堪忍かんにんしてくんなせえるか、イヤまんだこなさ
んは、わしどもを馬鹿にさつせる、最前から見てゐるに、酒も飲まないで生酔
とは猶じやうち(承知)ならまいわい、きはて、わつちは酒を飲みやせぬが、此
足が生酔だからなナニ足が酒を飲むもんか、馬鹿アつくさせつるな、きお
めえ大分でえぶあつくなるの、あしが酔よつたといふは、さつき(先刻)焼酎を吹きかけた
からそれに此足めが酔ひくさつて、ソレ御らうじろ、ひよろり〜、アレまだお
めえのあたまにからかばうとする、コリヤ〜〜なほんにこなさんの足

は、悪い酒ぢや、き左様さ、足は下戸の足がようござりやす、わつちは誠に困
り果てる、なそんならようござる、モウねまらまいか、女中〜、寢所を
頼みます(と、此うち女來り、それ〜に床をとり、ねかすと、田舎者二人は
そこへころげるや否や、前後も知らず、すう〜と高聲、彌次郎北八この女ど
もにこあたり文句もさま〜あれど、此とこと、めしどきの洒落はぐつとはし
よる。女どもは床をとつてしまひ、勝手へ行く、と彌次郎小聲になりて)「きた
八〜、實に手めえさつきまの女と約束をしたか、き知れたことよ、併しこつち
へは來ぬ積りだ、此次の間の壁まを傳はつて行くと、いき當つた所の襖をあける
そこに寢て居ると云ひをつたから、今に行かねばならね、きおれが先へいつて
やらう、き嫉それまずと早く寢なせえ(と、後うしろをふりむいて寢入る眞似する。彌次
郎も北八が邪魔をしてやらんと寢入りしふりして考へてゐる内、二人とも旅疲
れにや、思はずすやく〜と一寢入りし、暫くすると彌次郎兵衛ふつと目をさま

(と、彌次郎が顔に水を注ぎ)「彌次さんく、オ、く、ウ、ウ、ウ、ウ、引きいかく、どうしたのだく、」や「どうした所か、手めえおれをえらい日に逢はした、きなせく、」湯に入りながら、もう女が来るかくと思つて、あんまり長湯をしたから、きそれで湯氣にあがつたか、ハ、ハ、ハ、ハ、智恵のねえ咄しい、サア起ちな(と、やうくに着物を着せ、北八が肩にひっかけ、座敷に連れて歸ると、そのまゝ倒れて左もちからなさうに)「ア、く、今少しはつきりした、きおめえもとんだものだ、い、かげんにあがればい、」きイヤおれも、手めえの云つた通り大方女めが来るだらうと、待つた程に、向ふの流しに、かの年増らしいやつが、何か洗つてゐるから、コレ春中を流して下せえと云つたら、ハイと吐いて、六十ばかりの婆アめが、たはしを持って來やアがつて、お春中を洗ひませうかと吐かしやアがる、きこいつばい、(と、夢

中になり、寝籠ねはらばつてゐながら、足の指にてあとの方に寝ころんでゐる田舎者の耳をひつばつたりなにかして、もちやそびにする此田舎者とんだ氣のよい男にてそつと傍わきの方へあたまをよけると、きそれからどうした、き聞いてくれおれもあんまり業腹だから、いまくしい婆アめだ、たはしを持ってどうしやアがると云つたら、ハイくとぬかしてひつこんだが、やがて又はうてら庖丁の折れたのを持つて、うしやアがつて、これでお春中の垢をこそげ落してあげませうかと、おれを鍋か釜のやうに思つておやアがるさうな、いまくしい、きハ、ハ、ハ、こいつはでかしたく、(と、夢中になりて、又田舎者のあたまを足にてさがしまはし、耳をいぢりかけると、こらへかれて北八が足をとらへるなか「コレく最前からだまつてをれば、なんせ此足でわしが耳を颯り物にさつせえた(と、いはれて北八心づきて)「ハイこれは御免なせえ、おなかインニヤさて扱御免ではじやうち(承知)ならまいわい、それもこなさんが、夢中にならツせえて咄しきッせ

る手そぶりにやア、有らまい事でもないが、こつちであたまをよけようとする
と、又足で探りまはいては、勦り物にさツせる、なんぜ人のあたまア土足どぞくにつ
ツかけさツせえた、すまない〜、キソリヤお氣の毒な事だ、御免なせえ、此
様にお合宿するも他生たしやうの縁とやら、どうぞ了簡してやつて下さりませるか、こ
んたがさう云はつせりやア聽かまいものでもないが、あんまり人を馬鹿にさつ
せるから、ヨイヤもう生酔なまひだから堪忍かんにんしてくんなせえるか、イヤまだこなさ
んは、わしどもを馬鹿にさつせる、最前から見てなるに、酒も飲まないで生酔
とは猶じやうち(承知)ならまいわい、きばて、わつちは酒を飲みやせぬが、此
足が生酔だからぬか、ナニ足が酒を飲むもんか、馬鹿アつくさせつるな、きお
めえ大分でえぶあつくなるの、あしが酔よつたといふは、さつき(先刻)焼酎を吹きかけた
からそれに此足めが酔ひくさつて、ソレ御らうじろ、ひよろり〜、アレまだお
めえのあたまにからかほうとする、コリヤ〜、ぬか「ほんにこなさんの足

は、悪い酒ぢや、き「左様さ、足は下戸の足がようござりやす、わつちは誠に困
り果てる、ぬか「そんならようござる、モウねまらまいか、女中〜、寢所を
頼みます(と、此うち女來り、それ〜に床をとり、ねかすと、田舎者二人は
そこへころげるや否や、前後も知らず、すう〜と高聲、彌次郎北八この女ど
もにこあたり文句もさま〜あれど、此とここと、めしどきの洒落はぐつとはし
よる。女どもは床をとつてしまひ、勝手へ行く、と彌次郎小聲になりて)「きた
入〜、實に手めえさつきの女と約束をしたか、き「知れたことよ、併しこつち
へは來ぬ積りだ、此次の間の壁かを傳はつて行くと、いき當つた所の襖をあける
そこに寢て居ると云ひをつたから、今に行かねばならぬ、き「おれが先へいつて
やらう、き「嫉そねまずと早く寢なせえ(と、後うしろをふりむいて寢入る眞似する。彌次
郎も北八が邪覓をしてやらんと寢入りしふりして考へてゐる内、二人とも旅疲
れにや、思はずすや〜と一寢入りし、暫くすると彌次郎兵衛ふつと目をさま

小こゑになり)「きた八か〜」
 早く此處へ来てくれ「なんだ〜」
 次郎はそつと手を放し、北八に持たせてわきへはづしたるに、きた八驚き)「コ
 リヤ〜彌次さん、どうするのだ(と手を放しさうにすると、上の棚が落ちか
 る)故)「コリヤア〜」
 處へ行く、ア、手がだるくなる、コリヤもうどうする〜(と、うろ〜して
 る。彌次郎はくらまぎれ、そろ〜と先の方へ行きこし、壁を傳ひて勝手の
 かたへ出るに、庭の向ふに見ゆる有明の火かけほのかに、すかして見れば、か
 のゆきあたりの襖のそばに、一人寝てゐる者ある故、さてこそ北八が約束のし
 る物、しめこの兎と、いきなりに手をやつてさぐりみれば、こはいかに石の如
 く冷え氷りし人倒れぬたり。さながら生きたるものとも見えず。これは不思議

し見れば、行燈消えてまつくらがり、あたりもひつそり静まりたるに、じぶん
 はよしと拔^ぬけし、北八に鼻あかせんと、そつとおきたち、さし足にて次の間に
 出て、かたて聞き置きたる通り、さぐり〜壁をつたひて行くうち、彌次郎兵
 衛あまりに手を上へ延ばしたるにや、釣りたる棚板に手がつかへると、どうし
 たはづみやら、がたりといつて、棚がはづれたると見え彌次郎兵衛大きにきも
 をつぶし)「こいつは變^{へん}ちきだ、あんまりおれが手を延ばしたから、棚板がはづれ
 たさうな、手を離したら落ちるであらうし、何かがらくたがしこたまあげてあ
 るやうす、落ちたらみんなが目を覚ますだらう、こいつは難義な目に逢つた
 (と、両手を棚につつばつて立ちて居ても、ねからつまらず、手をはなせば
 棚^なが落ちる、縋^な袷一つで寒くはなるし、コリヤ情ない目に逢つた、どふぞ仕様
 はないかと、立はだかつて考へてゐるうち、かくともしらず、北八も目をさま
 し、おき出、これもだん〜壁をつたひて来る様子、彌次郎それとすかし見て、

と、こはぐ撫で廻せば、荒蕪あらこせにくるみてある故、彌次郎はつと驚き、俄に氣味がわるくなつて、がたくと震ひ出し、やう／＼に北八がぬる所へ這ひ冥り齒の根も合はぬふるへ聲にて、彌きた八まだそこにか、オ、彌次さんおめえ何處へいつた、コウ一寸と此處へ、イヤそこ所ではない、あそこに死んだものへ蕪こもがかけてあるから、もう／＼薄氣味うそきみの悪いうちだ、キヤ、とんだことをいふ、ヤ、ナニサほんとうに、アレあそこに、ア、とんだうちに泊り合せた、恐ろしや／＼(とそう／＼に這出し逃げ行く)キ、コレ／＼／＼おれを此處においてだうする、エ、それに、とんだことを云やアがつて、どうやら氣味が悪くなつた、コリヤたまらぬ／＼(と、がたくふるふる拍子に手がゆるみて、上の棚がぐわら／＼／＼、コリヤ叶はぬと、きた八逃げ出せしが、うろたへてとまどひをし、一向分らず、まごつくうち、この物音に勝手よりは亭主の聲して、行燈さげて出て来る様子、奥の間より田舎者が出て来る體故てい、いよくうろた

へ、店の方へはひ出る手もとに、蕪一枚ありしを幸、引かぶりて息をころしかみみゑると亭主あかりをもち出できもをつぶし「ヤア／＼／＼コリヤなんせ、棚が落ちた、膳箱も何も亂離らりこくたい忽敗になつた(と、そこら取り片付けるうち、何事やらんと田舎者二人ながらおき出で)「ヤレえらい音がせつと思つた、道理こそコリヤ地藏様いの側そばにまで箱どもが飛び散つて居るが、ヤア／＼／＼お鼻がぶつかけてしようた、今一人のゑなかも「ドリヤ／＼／＼ほんに地藏様の鼻ア無くならかいた、そこらにや無いか、イヤ此處に寝てゐるは誰だれぢやい(と、蕪をまくれば、きた八はばつとばかり顔を上げて見るに、そばには蕪に包みし石地藏あり。さては彌次郎兵衛が死んだ者のありしと云ひしは、この石地藏ならんと思ひぬるうち、亭主北八を見て)「ヤアこなさんはこちへ泊らせえたお客ぢやないか、それ今時分なんぞこない(此様)な所に、コリヤ合點がいかんわい、どうぢややら、こなさん達のたち姿素振胡散臭いと思ひをつたが、若しや護障の灰ぢやない

か、何ぞ又しよしめる積りか、有りやうに云はつせえるな「イヤそればかりぢやござらない、大方こなさんが此の棚を落したもんで、なんぞ地藏様のお鼻ア打ち缺いた、コリヤわしどもが村で、今度建立せる地藏様ぢや、きんのふ（昨日）石屋どのから請取つて、明日は早々あした長澤ちやうたくじ寺様へ納めにやならぬが、お鼻がうち缺けては、持つていかれぬ、元の通り償はほどツせえ（これは此近在の人々村のお寺へ納める地藏也、石屋より持つて歸る所、おそなはりし故、今宵は此處に泊りしと見えたり。亭主愈々やつきとなり）「お地藏様のお鼻もお鼻ぢやがおまい方のお荷物、なんぞなくなりはせないか、どうしても合點のいかぬ奴等ぢや、有りやうに云ひなまりまいかき「イヤわしらは、そんな者ぢやアねえ、めつたなことを云ひなさんな、しらきちやうめん帳面の旅人だるな「インネ、さうぢやあらまい、又それで無けらにやア、なんぞ今時分其處に寝ておさつせえたき「イヤこれはの、手水に行くつてき「たわけたことをつくさまい、手水場は座敷の

縁先えんさきにあるものを、定めし宵にもいたであるに、そないなまにあひ間似合くやせんわいき「さう云はれちやア、わつちも面目ないが、恥を云はにやアり理が聞えぬ、有體ていに云ひやせうて「オ、サ云はいでどうせるもんぢやき「イヤどうもお恥かしいが、今頃わつちが此處にまこつて居つたといふわけは、ツイ夜這よばひに来て此棚の落ちたに、うるたへたのでござりやするな「ナニ夜這よばひに來た、イヤはや、こなさんは、たはけもんぢや、どこの國にか、石地藏様の所へ夜這よばひに來て、どうせる積りぢやて「云へば云ふ程、碌なことはぬかしをらぬき「コリヤとんだ災難に逢ふことだ、彌次さんく（と、呼び立てる、先刻より彌次郎は立ち聞して腹筋をよ搓りあたりけるが、もうよい時分と立ち出で）「コンヤアどなたもお氣の毒な、あれやアわつちが受合、胡亂うらんな者ぢやアござりやせぬ、料簡してやつてくんせえ、又地藏様の鼻とやらが缺けたと云ひなさるが、どうぞわつちに免じて、後あとではどうとも致しやせう（と、色々ちやらくらと斷りを云ひちら

し、亭主も今はせんかたなく、さながら悪者とも見えぬ手あひ、一通りは云つたものの、今は納得して済ましければ)

はひかけし地蔵の顔も三度笠またかぶりたる首尾のわるさよ

かく即吟の彌次郎兵衛が狂歌に、おのくどつと笑を催し、やうくいさく

さをさまりけるにぞ、未だ夜の明くるには程もあらんと、銘々廢所に道入りたるが、暫くありて早や一ばん鷄の告げわたる聲々、馬の嘶き表に聞え、彌次郎

兵衛北八急ぎ起き出て支度整へ、やがて此宿を立ち出づるとて

やうくと東海道もこれからははなのみやこへ四日市なり

それより濱田村を打ち過ぎ、赤堀にさしかかりたるに、往來殊に賑はしく、

男女大勢此處彼處につどひ集まりたるは、何事にやと、彌次郎兵衛北八も片寄り行きつゝ、ある親仁に向ひて

「モシく何でござりやすおやぢあれ見さつ

せえ、喧嘩でもござりやすかおやぢインネ、天蓋寺の蛸薬師さまが桑名へ開

帳に行かしやるので、今こゝを通らつせるから

「ハ、ア成程向ふへ見える

く(と、此内だんく人足繁くなり、講中と覺しく、眞先に村の名を染めた

る幟をおし立ていづれも大音にて)「かう中なアまアだア」

「幟を持つていく奴

てたのぢやアねえ、なまだと見える」

「かう中なアまアだア」

「幟を持つていく奴

の面ア見さつし、智慧のねえ面だぜ

「かう中」お賽錢はこれへく、是は海中より

芋畑へ出現したまふ所の、天蓋寺蛸薬師如來、御信心のかたはお心持次第

あげさつしやりませう、サアくお心持はようござりますかな

「今朝程は中

かさて三膳ほど食べました」

「ソリヤ蛸どのがござつた」

(と、此内御厨子

と、此處彼處に集りぬる婆、鼻ども十念を願ひけるに

「わかさう」お十念く(と、い

ふと、乗り物をおろす。若蕪の戸を引あくれば、和尙はゆで蛸の如き赤ら顔

にて、大痘痕、髭だらけの、でつくり和尙、さもしかつべらしく)

「なむあみ

ぬが、誰ぞ食はせると、まだく〜いくらでもはいりやす こんびら「コレハ面白い
 モシ無^ぶしつげながら何と私がお振舞ひ申しませう、もうそれだけあがつて御ら
 うじませぬか や「食ひやせうとも こんびら「もしあがらぬと、貴方のお倒れぢや
 が、ようござりまするか や「そりや知れたことさへ」と、圖に乗つて饅頭をとり寄
 せ、食ひかゝりしが、十ばかり食つて、あとはもうおくびに出る位なれど、お
 のれ金毘羅、鼻あかせてやらんと、無理におし込み皆くつてしもふ こんびら「コ
 リヤたまらぬ、えらい〜、もう〜私はかなひませぬ や「おめえもやらかし
 て見なせえ、こんな小さな物はいくらでも食はれる こんびら「イヤさうは参りま
 せぬ、併し私もあまり残念な、十ばかりたべてみませう や「ナ二十ぐらぬ、二
 十食ひなせえ、その代り、一つも残さず食ひなすつたならば、饅頭の代は勿論、
 外に百文金毘羅様へお初穂^{はつは}をあげやせう こんびら「そりや有難い、てんぼの皮、
 やつて見ませう（と、饅頭二十取り寄せ、たゞもじ〜と見てばかりぬたりけ

るが、やがてくひかゝると、ぼつり〜十ばかり食つてしまひ、あとはいやさ
 うな顔付にてやう〜と残らず食つてしまふ。彌次あてが違ひ や「コリヤ恐れ
 る〜 こんびら「お約束の通り饅頭代はさし引いて、お初穂の百文下さりませ
や「今上げやせう、併しあんまり見事だから、もう二十食ひなせえ、こんど今度はお
 初穂を三百文上げやせう、その代り食はれえと、こつちへ二百とリツこだが、ど
 うだ〜 こんびら「面白い〜、何も慾^{よく}徳、腹の裂けるまでやつて見ませう や「サ
 ア〜今度は現^{げん}銭だ、おめえも二百そこへ出して置きなと彌次郎三百文をつき
 出し、なんでも今取られたお初穂の百文に利を付けて取る氣になり、よもやも
 う食はれめえと思ひ込んで、饅頭を又々二十取寄せ、金毘羅へすゝめるや否や、
 このたびは何の苦もなく忽ち二十食てしまひ、手早くかの三百文を ちやくふく着服して
こんびら「これは有難い、饅頭の代も宜しうお頼み申します、ハ、ハ、ハ、思ひが
 けないおさうさに預かりました、ハイゆるりとこれに（と、みさほこお神酒雑をせな

貧ひ、あとをも見ずして出て行きたるに、彌次郎は呆れはてしぬる。ま、
 、大方こんな事にならうと思つた。ま、いま／＼しい目に逢はしやアがつた、初
 の百が惜しくなつて、上乘をした、業腹な（と、此内、下の方よりかこかきぶ
 ら／＼と來りて）且那方はお駕は入らしやりませぬか。ま、駕所ぢやアねえ、え
 らい目に逢つた、饅頭の食ひごつこをして、錢三百只取られた。かこかきハ、ア
 今の金毘羅めぢやな、てきめはあないな風をしてあるきをるが、アリヤ大津の
 釜七といふえらい手づまつかひぢやげな、こんぢうも坂の下で餅の食ひくらで、
 七十八とやら食らつたと見せて、錢は入に拂はせ、餅をばみんな袂へさらひ込
 んで、うせをつたといふ事ぢやが、且那も一杯箱められさつせえたのハ、
 、（此はなしのうち、伊勢參りの子供二人、饅頭を三ツ四ツづゝ手に持ちて食
 ひながら、この門口へ來り）いせ參り「ハイ且那樣、抜參詣に御ほうしや。ま、コレ
 手めえ達やア、その饅頭を誰に貰つた。いせ參り「ハイコレヤこのあとで金毘羅參

りの人が袂から出してくれました。ま、エ、そんなら、あいつめがくらつたと見
 せやアがつて、おいらをだまくらかしやアがつたか、いま／＼しい、ぼつかけ
 てぶちのめさうか。ま、い／＼はな、おいらも神參りだ、堪忍してやりなせえ、み
 んなこつちが間拔だからよ、ハ、ハ、ハ、ま、それだとして、あんまり業が煮えか
 へる。ま、昨宵の泊りでおれをえらい目に逢はせたその報だと思ひなせえ、ほん
 にい／＼業晒した。
 盗人ぬすびとに追分おひわけなれや饅頭まんじゅうのあんあんのほかる初穂はつほとられて
 ま、エ、面白くもねえ、洒落やんな、モシ／＼饅頭の代はいくらだね。ま、ハイ
 残ずめて貳百三十三文でござります。ま、せう事がねえ（と、ふせう／＼に
 錢を拂ふと）かこかき「且那まんほしに安く召して下さりませ。ま、いや／＼かこ
 かき「酒手さかてで參りましょう。ま、貴様酒を呑むか。かこかき「ハイ酒は好きで一升だけ
 を下さります。ま、また酒の呑みツくらしようと思つてか、もういやだ／＼、サ

ア北八出かけよう(と、これより伊勢参宮道へはいる)。

道中膝栗毛五編卷之上終

袖珍文庫目錄

- | | | | | | | | | | |
|--------------|--------------|---------------------------------|--------------|-----------|--------------|--------------|-----------|--------------|---------------|
| 10 平家物語 下編 | 9 いろは文庫 下編 | 8 修紫田舍源氏 全四冊
一ノ編 二ノ編 三ノ編 四ノ編 | 7 平家物語 中篇 | 6 俳諧七部集 全 | 5 平家物語 上編 | 4 文章軌範 全 | 3 武將感狀記 全 | 2 いろは文庫 中編 | 1 いろは文庫 上編 |
| 20 修紫田舍源氏 四編 | 19 東海道膝栗毛 下編 | 18 枕草紙 全 | 17 修紫田舍源氏 三編 | 16 古今集 全 | 15 俳風やなぎ樽 一編 | 14 東海道膝栗毛 上編 | 13 萬葉集 上卷 | 12 修紫田舍源氏 二編 | 11 最田川梅柳新書 合巻 |

(既刊)

(近刊)

袖珍文庫 14 膝栗毛上

正價 金 二十二 五 錢

東京市神田區佐木町二十一番地
 發行所 鈴木種次郎
 東京市本所區吉岡町十二番地
 發行者 山本銀次郎
 東京市京橋區西船場町廿七番地
 印刷者 石川金太
 東京市京橋區西船場町廿七番地
 印刷所 株式會社 秀英會

東京市神田區 三教書院

電話本局 三三六一番
 櫻橋東京 四五八〇番

昭和十五年九月廿一日印刷
 昭和十四年九月廿八日發行

袖珍文庫發賣所

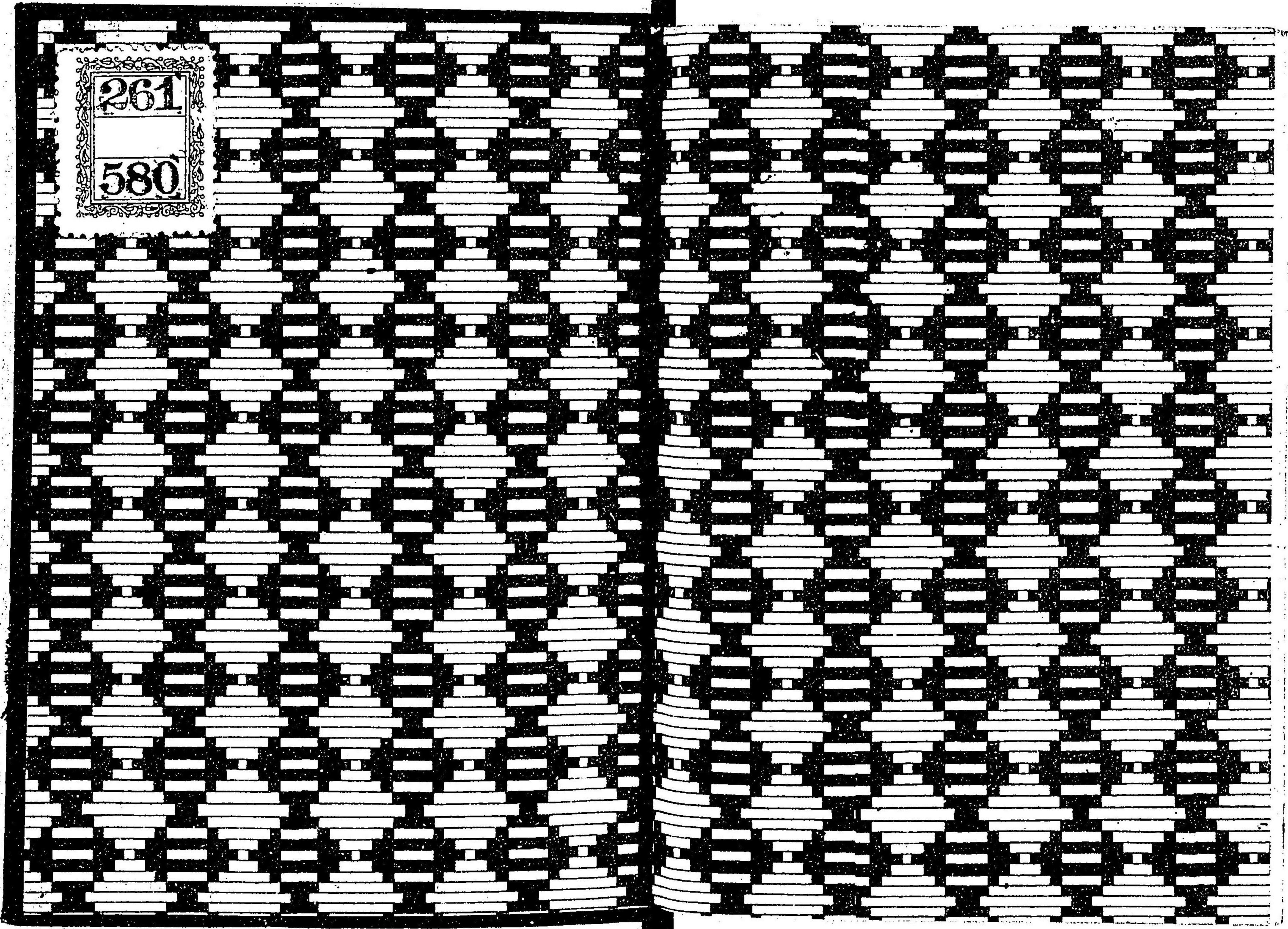
關東	東京市神田	東京堂
發賣元	表神保町	
關西	大阪市東區	杉本書店
發賣元	北渡邊町	
東京	日本橋	林平書店
同	太	洋
同	亞	誠
同	文	林
同	前	川
同	京	橋
同	東	海
同	北	陸
同	神	田
同	上	屋

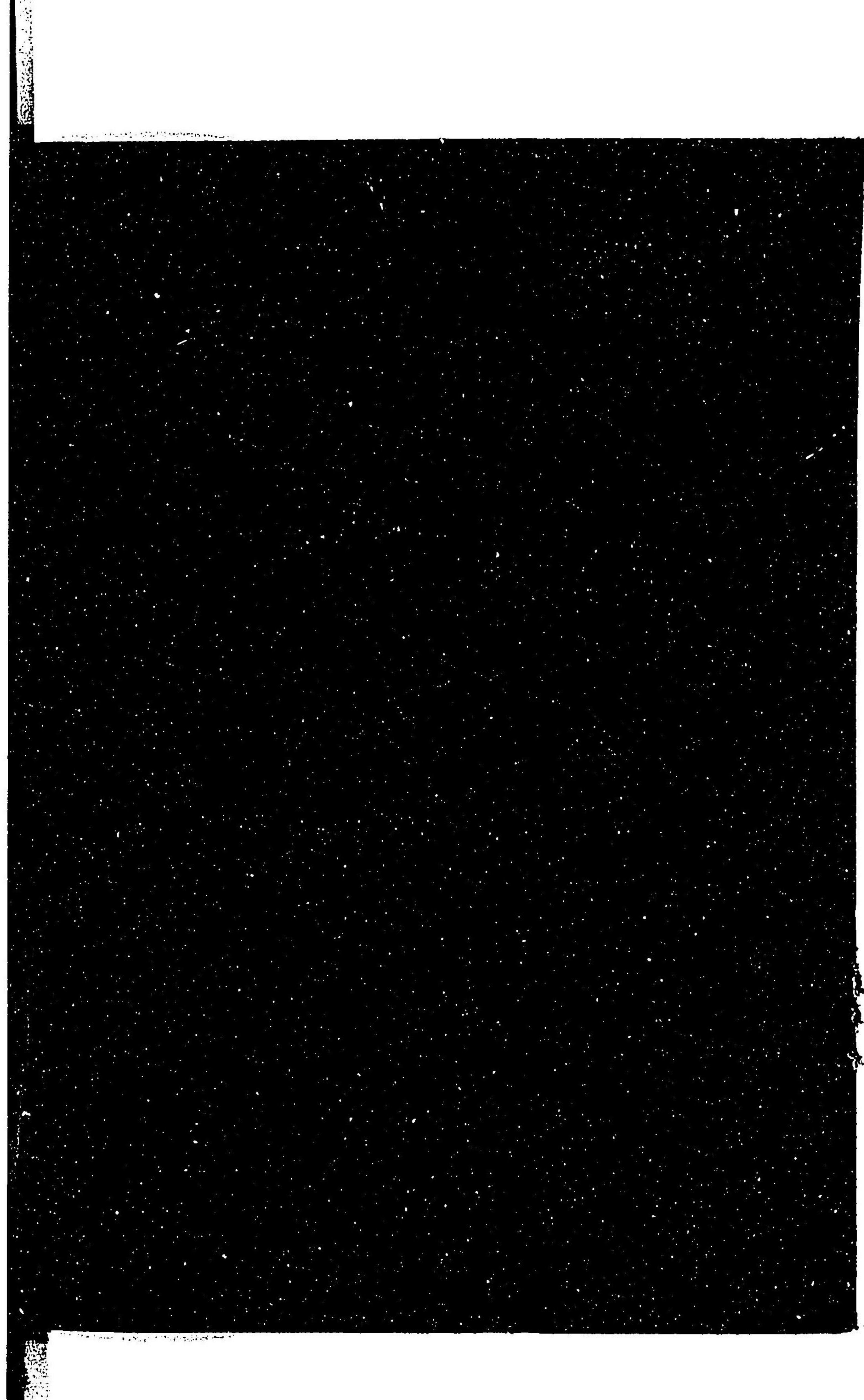
同	新	名	京	關	廣	久	博	京	大
島	島	古	郊	山	島	留	多	城	連
島	島	屋	寶	東	山	菊	積	日	大
島	島	野	文	枝	陽	竹	喜	韓	阪
島	島	書	館	書	書	書	館	書	屋
島	島	店	支	會	支	支	支	支	支
島	島	支	社	社	店	店	店	店	店

◎其他全國各書肆

261

580





089547-001-1

特63-892

東海道中膝栗毛

十返舎 一九/著

上

M43

DBM-1449



